会報 特攻
平成10年2月
第34号
〒105 東京都港区虎ノ門3—6—8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
編集人 田中賢一
発行人 木村元正

平成「離騒」篇

「離騒」とは「憂いに離る」という意味である。奸臣に讒言せられ楚の国を追放された屈原（前341～278）が、憂国の情もだし難く「離騒」と題する三七〇句の長篇詩を世に残した。屈原のいう離騒とは憂国と同意義である。屈原を退けた楚の懐王は、秦に欺かれ敵国に行き彼の地で死ぬ。屈原は後を継いで立った頃襄王に追放され、沮羅の淵に身を投ずるが、楚もやがて秦に亡ぼされる。

ところで、現下我が国の朝野に瀰漫している反日的自虐的史観は、まさに離騒に価する。屈原はこの詩をもって我が志を、国王並びにそれを取り巻く奸臣共に告げ、併せて楚辞として後世に残したのであるが、我々は会報「特攻」を始めとするあらゆる媒体をもって要路の人に訓えると共に、広く世論を喚起しようとするもので、編する文書は「平成離騒編」とでも称すべき乎。

顧みるに特攻烈士は国難を打開する為、後に続く者あるを信じ、莞爾として征ったのである。我々は慰霊と称し祭事を行うが、それが生残った者の贖罪にも似た気持を露すだけに終ってはならぬ。特攻烈士の精神を世に訴えると共に後世に伝えることが、今となっては後に続くを信じて征った人達に報ゆる唯一の途であり、とりも直さずこれが慰霊ということになる。

然るに何ぞ、世上の反日的自虐的史観に汚染された徒輩は、大東亜戦争を曲解し、近隣二、三の国に阿諛し、殉国の精神を否定しようとしている。荏苒手を拱ねていては、屈原が憂いた如く祖国の滅亡に繋る。

父祖の代を悪しと呪ひしいやはては
失せゆきし国 知らざるか汝

戦争中にも劣らぬ国難が今や迫っているのである。

しかるに、滔々として世を覆っている暗雲を拂い除くのは容易なことではない。昔の国定教科書には死んでも口からラッパを放さなかった木口小平の話も載っていた。沈没した潜航艇の中で認めた佐久間艇長の遺書も伝えていた。それらで教育された日本人だったから、苛酷な戦況に堪えて戦えたのだ、特攻隊も志願したのだ。今特攻戦史を繙けば、昔の修身の教科書に載るような事例は無数にある。それが何事ぞ、戦場慰安婦のことは載せても、そのようなことに見向きもしない教科書編集者、それに同調する役人と政治家、正しく離騒である。

昨年の八月十五日、例年通り政府主催の戦没者追悼式が武道館内に標柱を建てて行われた。戦死者に対し国は何故靖国神社で行わぬのか、そのことはさて措き、新聞の報ずる橋本首相の式辞を見るに、橋本お前もかと言わざるを得ない。〝あの戦争は、わが国のみならず多くの国々、とりわけアジヤ近隣諸国に対しても多くの苦しみと悲しみを与えました。私はこの事実を謙虚に受け止め、深い反省と共に、謹んで哀悼の意を表すものであります〟とある。

先ず、これが戦死者に対する追悼の言葉か、戦死者のみ魂にもの言うならば、その死の価値を称えねばならぬ。これではまるでお前らは罪禍を犯したぞと言はぬばかりではないか。しかも近隣諸国の中には、あの戦争によって植民地としての桎梏から脱し得た国があるという史実さえ覚らぬとは、戦後教育の恐しさをまざまざと示している。思えば離騒は果しない。

世にこれを東京裁判史観という。史観などというと何か思想的な哲学的な語感を持つが、何のことはない、敵国が仕立てた日本悪玉論である。こうまで浸透すると脱却するのは容易なことではない。屈原は「離騒」の末尾で〝吾将に彭咸の居る所に従はんとす〟と言っている。彭咸とは楚人の思慕する理想の人物である。我々は祖国を離れて行く処はない。

（田中賢一）

目次

平成「離騒」編……1
小林敏男大尉の遺稿……2
特攻隊絵葉書発行に因んで②……9
回天の黒木少佐と佐久間艇長……13
ビデオ二つの特攻隊物語……16
特攻隊のビデオを見て……17
（各地の慰霊祭）明野21、江田島Ⓛ22、原町特攻22、川南空挺23、大津島回天24、長野回天25、靖國神社第一御楯隊26
戦没者慰霊画展示の報告……27
「特攻散華」展予告……28

陸軍大尉
小林敏男　遺稿

（誠三十七飛行隊長）

解説　金　文男

小林敏男命の遺稿は見る者須らく感動の迫り来て、心穏やかならず。日を追うに従い　字の乱れあるも、国に殉ずる心は益々旺盛となるを知る。

隊員先輩の　冥福を祈る

庚午玄冬　金　文男

巻頭に掲載した如く、小林敏男隊長外八神鷲は、特別進級及び優渥なる恩賞を発表されたり。

然し編成と共に隊員として契りを結びし中村曹長、石川伍長の殉職による不参は痛恨察するに余りある。　合掌

誠三十七飛行隊

隊長　小林　敏男

小林少尉

幹候7期　少尉

隊員　柏木　誠一

幹候9期　少尉

同　佐々木秀三

操縦候補生9期　少尉

同　藤沢鉄之助

下士91期　軍曹

同　小屋　哲郎

右同　軍曹

同　玉野　光一

右同　軍曹

同　赤峰　均

乗養米10期　伍長

同　百瀬　恒男

乗養古11期　伍長

同　入江　寛

少年飛行兵11期　伍長

誠37隊の隊長たりし小林敏男命の遺稿集より抜粋したるものにして、当隊の編成より、出撃の前日までの隊員の様子、更に本人の抱きたる心境を充分に察知出来得るものと思はれる。

既に四十五年経たる為に、破損、汚損甚だしく判読は甚だ困難を極めたり。然し、これにより隊員の動静を知る唯一の手懸かりとなり、ご参考になり得れば　幸甚なり。

昭和二十年一月一日より、四月五日（出撃前日）までの日誌、外に遺詠集もあり後日出版の予定　　金　文男

日　記

一月一日　月　雪後曇

遂に　新しき　昭和二十年を迎えぬ

負ける年の次は　迎ふるもの必ずや

勝つべき年にせずむばあるべからず。

比島の戦局は益々重大を極め、戦局の推移は予測を許さず。

午前　御真影拝賀式の後　会食あり。大君の万歳を絶叫しぬ。

午後は居残り　五十日振りにて、高練の試験飛行を行ひぬ。　夜　花輪と共に田中軍生宅を訪ぬ。三年振りに　実に愉しき　かるた会を行ふを得たり。心の楽しさ限りなく、時のすぐるを忘れたり。　年の初より、かかる娯楽にふけるとは不可なりと言ふ者ありや、然れども　吾は忘れず、死闘続くる戦友等の姿は。

一月二日　火　晴

早く登校し　花輪を乗せて大邱に向ふ、寒し、朝鮮とは実に寒き所なり。発動機調子悪く、出発し得ず一泊す。大邱の町に出で江崎大尉殿の生家を訪ぬ。山海の珍味の馳走に与かり、いけす旅館のコタツにもぐりて睡る。

一月二十七日　土　曇

午前　編隊　午後愈々九七戦、水戸空輸決定し、航法計画を立てて大童なり。

転属発表あり、三井、西川大尉、関口、渋谷、石川中尉、それに吾が区隊長、野村中尉も加え、更に　大矢、三宅、増田と　実に四十名を数ふ大転出なり。

我に　未だ命は来たらず。

（金文男、註）戦雲正に急を告げる折、大刀飛校幹部の大量転出あり。尚　近々大刀飛校の廃校も予定されていた。

渋谷中尉第六十四振武隊S20、6、11戦死　菊池隊区隊長

石川中尉第六十二振武隊S20、4、3戦死　木脇隊区隊長

二月十七日　土　曇

大命は遂に下りぬ。敏男　二十五年の生を捧げむ好機　遂に至る。

心中の正気　正に爆発したる感あり。

然も　その任たるや嗚呼。

醜の　醜の吾にはあれど　尊き

これが任務　果たさざらめや

醜の吾　特攻隊長の命を拝しぬ

必ずや　必ずや　成さざらめやも

醜の　醜の吾にはあれど　尊き勅賜り

その夜　寝むれず

二月十八日　曇時々晴

一時　学校に行きて　整理をした後終日家に在りて荷造りを行ふ。　夜下宿の人々と共に最後の会食を行ひ、余に取りて最後のレコードを聞きて寝る。　第五、未完成、椿姫ああ何と美しき音楽よ。

大君の勅かしこみ　富士ケ嶺に
おくつき　委ね征く日ぞ来る
敵　機動部隊　大挙帝都に来襲す
明けの日　吾に命は下りぬ

大城滑走路設定交渉の為、北野にありし時、大命下りたるを知りて、急遽帰校す。時に一八〇〇なり。

申告の後　壮行会あり、引き続き飛行科内の送別会あり。家に帰りて　寝に就きしも容易に寝るを得ざりき。

（金文男、註）二月十七日大命を受け隊員の編成も同時に完了す、隊長以下十二名、各隊員の自筆による身上書は別紙の通り。

脊振に入る陽　眺めて余の心
感おこるなく何の故ぞも

大刀洗は余を生み、而も余を育てたる地なり、去らむとして感無きは何の故ぞ。愛惜を感ずるもの無しや　あらず然らず　多々あり　されどすべては捨つる時なり。音楽も、愛情も、友情も今は要なし。只　ひたすらに勅のままに進まんのみ。これ大君に与えられたる只一つの道なり。

二月十九日　月　晴

晴れたれど　風は強く　飛機を待ちてオダ　を揚ぐ。　一五三〇出発　一七三〇京都着、一泊。　大津屋にて美しき京舞子等を見る。　然れども余に何等の情　湧く事なし

二月二十日　火　晴

〇七三〇　京都発　怪しくも　気尊き不二ケ嶺に万感の情を馳せ乍ら東海道を一気に下りて立川に着きし時は正〇九〇〇なりき。　科長　浅田少尉に別れ、常磐線にて水戸に入る。一五〇〇家に入る。　母を始め　皆々驚きたる様なり　心に思う所ありて　口に出さざるは　苦しき事なり。　明ら様に心中を吐露す。夜　小野に会ふ。

二月二十二日　木　雪

祖父の命日なり。　朝より雪繁く降り注ぐ中で、伯父に送られて家を……
……（不明）　の故郷の水戸を去る。　一二〇〇　四街道に着きしは十四時若干過ぎなり下志津部隊長に申告の後、直ちに　銚子に向かい出発、吹雪益々繁し、一九〇〇　銚子着怪しげな旅館に一泊す。

二月二十六日　月　雪後晴

白雪から　新雪全土を掩ふ　朝起き出でて先ず驚きぬ、積むる事尺余なり。吹雪繁き中を登庁す。　敵機再び襲はざるやと懸念しありしも、杞憂に過ぎざりき。午後に至りて雪雲からりと去りて陽　燦々と輝き　暖かき事一時に春の訪れを思はせり。

野村中尉殿よりLGの取り扱いの教育を受けて一六〇〇頃帰る。

床に入りて　生を思い　死を思ひ
うつつの中に　夜明けとなりぬ

起きてあれば　常に口に強き事を言うも　寝に就きて静かに生を思へ心安らぎ得ず。

これ未だ吾が『心』の出来得ざる為なるべし。　二十五年の生涯は遂に童貞を守り、然も遂に　清く、美しく散らむとする、可なりや、臆病なるが故ならずや。

特攻隊と言ふ言葉の神聖さと
醜の吾が身をしまし思うも

と吾が為りぬ今は

特攻隊員の心や如何にと忍びしも
その神鷲　と為りて感無し
今ぞ出で征く
幾十度戦友を送りて　遂に　遂に
醜のヒナ鷲征く日ぞ来る
吾が歌を始めて　わずか二年にて
万葉を手放す時とはなりぬ

（愈々出発と言ふ時に至りて気分急転直下し悲壮なるものになる）と隊長は言へり。

今の余が心の冷静なるは　無頓着なる為なりや、果たしてその機にいたりて気逞れするにあらざるや。　然らずかかる事は絶対に無し。　之　若き頃より　ある精神に目……（不明）

もて生き続けたる余が尊き信念なれば、只余が唯一の心配は、隊長たる余の技倆の未熟なること、然も性能悪き55を以て、果たして目的を達し得るや、今ただ成功を神かけて祈るのみ。

勿論余は十二分を発揮して奮闘すべし、これ余が二十五年に貯積したる能力の爆発すべき神機なれば　後はただ正気の発すると信じ天佑を待つのみなり。

三月一日　木　晴

弥生の空は見渡す限り　さくら　さくら花盛り、　嗚呼　桜よ、花よ　今一度汝等の咲き誇る姿を眺めて征きたきものを。

人生への欲望勃々として湧き出ずるを如何せむ、する事無く過ぎ行く一日一日は尊き尊き日なるも、　かかる　のどかなる日の打ち続くは……
（不明）と思ふ吾が心を益々弱め堅き心を緩めるよすがは如かじ。

隊長会報より隊長帰る。　吾等近く前橋、壬生、下志津のいずれかに出張すと聞く。関東高女の女学生より、日の丸鉢巻を十二本頂き隊員に分配す。各自頭にグッと引き締めて　感ずる所のもの多々あり。礼状を書く（歌三首前出）

午前午後を通じ和歌の作り方に関し隊員一同に説明し彼等の歌を添削。　勿論吾にその能力は無きも辞世位は作らせむとする情熱より発しての事なり。

（俺はどうせ死ぬんだから　世の中のしたい事は　何でもして行こう）と言ふ気　若干なりとも隊員一同の内に潜在するを見る。　時々余もこれが欲望に引かるる事もあれど、清き心は最後まで守り通さむと努力を続く。心中何等かの不安存在するは吾等が飛機未だ来たらざる事なり。　以下省略

三月二日　金　晴

雨なり、千葉、東京は雪なるべし。本校より師団長来る。振武隊出陣式を格納庫内にて行ふ。　師団長の訓辞言々切々として胸にひびくものあり き。引き続き会食ありて暗闇の中を雨に打たれ歌をうたいつつ帰る。

三月三日　土　晴

隊長　野村中尉殿より　きつい注意を享く、　今日までの余等の行動は確かに　たるみの極みをつくしたり、然もそれを正さむとする力無く、流れのままに流れ行く、余が姿勢にあわれなり。　隊長の身にて登庁時間に遅れる何ぞ卒先垂範ありや。

午後　銚子市役所後援にて慰問行はる。　演中途にして　振武隊員壇上に立ちて（貴様と俺とは同期の翼）を歌う。合唱正にたけなわなる頃、見物人の中に　すすり泣きわきおこり、笑い声は、泣き声に変わり、冷たき空気張りたり。この時　佐々木台上に飛び上がりて漫談を行ふ。正にヒットなり。終わりて会食に移る。　再び演芸あり、余正気の歌を唱ふ。詰め切りなり。

（金文男、註）一月二十七日　大刀飛校幹部の大異動あり。京都教育隊でありし野村中尉も転属し、銚子飛行場に於て教官として訓練に勉みおり。

三月四日　日　曇後雨

休日　再び空襲あり　B—29帝都に来襲せりと。東京に出でむとして果たさず。越中屋より大新に移る。大新にてボサボサして終日すごせり。暗闇の中を雨に打たれて伝令来る。三十七、三十六飛行隊　明日前橋に輸進せよとの命なり、怪しげなる夢を見たり。

三月五日　月　雨後曇

登庁後直ちに準備　申告の後一旦家に帰る。一二二〇銚子を発す。　汽車東京に入るに及びて余等の闘志むらむらと湧き出でぬ。　見よ、あの家々を、路頭に迷へる人々を、爆撃の跡を見るも惨たり。家財を掘り出さむと鍬ふるふ人々、只呆然と廃墟に立てる人々、見よ必ずや見よ　国民よ、余は兄等の怨みを必ずや果たさむ。而も国民よいささかの被害に心くじく勿れ、神州は断じて不滅なり。神州は余等の後追ふ者の多数あるを信じたまへ（汽車中にて）

三月七日　水　晴

朝と夜　風弱くして日中物凄く吹きまくるはこの地の特徴なり。而も三日の風は殊に凄きものなりと判断す。午前飛機の偽装、午後艦船攻撃に就いて学課せり。

余　大阪商船に在りし頃修めし種々の知識此の時に於て計らずも役立つとは又も不思議、七つの海を制する事即ち世界を制覇すと思謂し、船に進むべき道を希みたる余の遂には之を攻撃する事と為りぬ。船と共にその死場所を大洋に見出すは、偶然にして偶然にあらず。すべて天の命なり。

（己を知り　彼を知らば百戦あやふからず）　今の吾らにとりて船を知る事、乃ち彼を知る第一歩なり。　川越氏、大中氏、加納兄に頼り（原文のまま）せり。

正気隊隊歌として大中氏に作曲を依頼せる歌詞左の如し。

（金文男、註）隊長　小林敏男は水戸の出身にして、幼少より文武に励み、特に藤田東湖先生の言動に心酔し、余暇を利して『正気隊』歌詞を作れり。

三月八日　木　晴

見はるかす　山はだらなる雪積めど
のどけき春の光ぞ満てり
赤城山　頂く雪の溶け初めて
光のどけき春訪れぬ
赤城山　引くすそ遂に谷まりて
遠くかすめる筑波と為りぬ
故郷の筑波の山の小さきに
二十五年の生命を想ふ
十一の尊き生命賜りて
敵三万をほふらむと気負ふ

（中略）

師団長の視察ありて午前中掃除を行ひ後光満ちたる関八州を暫し眺む。一三〇〇　飛行師団長来たり、会食時色々の話を承る。二旬を経ずして吾等出陣

すと聞けり。訓練を望むも難き事なるべし。　吾等が飛機逐次集中す。佐々木、百瀬を家に帰す。　後藤先生、坂内、花輪に頼す。

（金文男、註）『正気隊』隊歌の作曲は偶々知遇を得たる、当時作曲の第一人者であった、大中寅二先生に依頼し完成されたものである。大中先生の作曲になる『椰子の実』は余りにも有名な傑作曲、先年死去す。

三月九日　金　晴

前項省略

中村　地上滑走にてペラを破損せしと聞く。精神の弛緩はあらずやと若干心配せり。

赤峰外泊より帰る。吾等が飛機その大部集結を完了す。　出撃の日、最早遠からず、只々うらむべきは吾れに夜間飛行の経験無き事なり。

（金文男、註）隊長小林敏男の遺稿集に、更に詩、短歌を記録せるものあり。日常の苦労を歌に託し、また幹候出身の緑か、柏木誠一を片腕として、行動を共に、苦労を共にせることを歌にするもの多々あり。

三月十日　土　晴

陸軍記念日なり。午前より行動を開始し、終日物資の集中に奔走せり。高崎聯隊、農会、飛行場、高崎聯隊、専売局、ハム工場、県庁、卵屋、清里農会、飛行場　得しところの物資多々ありて、実に良く活躍したる一日なり。

隊員一同飛機の分散、偽装。三十八飛行隊等到着す。

（金文男、註）三十八飛行隊とは、二月十七日に、同時大命を受けし、小野生三を隊長とする飛行隊であり、大刀飛校出身者により編成、昭和20、4、6に七神鷲として突撃される。

三月十一日　日　晴　風若干強し

午前、午後を通じ燃料の分散に奔走す。前橋税務署に酒の交渉に行きたるも、休日にて所長不在なり。飛行場大隊佐々木少尉態度不逞なるにより撲る。結果の如何を問わず余のとりたる行動は軍紀保持の為め、当然の行動なり。思うに　若くして独立隊長等になるは老成してもっての外なり。

石川中尉を長とする新たなる特攻隊編成る。十一の部下を持ち隊長たる余の悩み多々あり而も行かば断じて帰らざる十二の命なれば。流石に将校の精神は立派なり。八名の下士官の中に、未だに心定かならざる者あり、これを喜びて死地におもむかしむるもの、一にかかって余の責任にあるを思へ、その任愈々重大なるを知る。

如何すべしや。先ず以て　適当なる精神訓話を必要とす。

思へば己一個の生死等の最早問題にあらず。余が思いは十二の命の生死にあり。此処に喜ぶ生死とは、何ぞ十二の生命を死せしむる事なり。而して永遠の生命ある国に生かしむるにあり。この観念に至るまで十二の生命を引っぱり行く事、乃ち余が当面の最も力入べき業事なり。　精神訓話の草稿を今よりねらむと。

己一個の如何に小さきや天体より発して知らしむる事。

以下省略

三月十八日　晴

思ふだに愉しき一日なりき。　五時起床　飛行演習、超低空を行ふ、後　大中寅二先生を高崎に迎へに行き　飛行場に至りて吾等　正気隊　隊歌を練習す。　午後一同打つれて伊香保に至る。　この地に於ける一時こそ吾等が胸、喜びに満ちたる愉しき時なりき。あどけ無き子等の、吾等を慕いて集まり来る姿、涙流るる程うれしかりき。……不明国民校五女、小西愛子吾がマスコットなり。

三月二十日　晴

晴の門出　出陣式の日なり。　この日を迎へても　而も出で立たむとする心境何等変わる所無し。　特攻隊として突撃を敢行するは他人の如き感せらる。

一四〇〇師団長来たり一六〇〇より神儀　出陣式を行ふ、　引き続き会食ありたるも、態度不可なりとの理由に依りて師団長　中途にて座を立ち、冷たき空気張りたり。

感多くありて、吾が胸を去来せしもかかる　ささたる事、最早論ずるに足らず。

吾等が念ひは只々大任の達成あるのみ。

三月二十一日　晴後曇

昨夜の不愉快なる気　未だ去らず。師団長　飛行場を去るに際し、訓辞ありぬ。

隊員は飛機は配当し、試運転、試験飛行を行はしむ。

大中氏、花輪より頼り（原文のまま）あり。午後航法計画を立つ。

三月二十三日

特攻隊、特攻隊と言ひて　おごるは不可なり。　三井大尉殿より注意を受く。反発せんとする心　若干ありとは雖、強く胸をさされるものありき　果

たして、大任を果たし得べしや如何解らぬ身にして、二言目には特攻隊の名を出し、生きながら　神様扱いを受け、省みて心に恥づべき点無しや。迫力は足らず　闘志に欠けたりと言はれ、而も反発し得る力ありや。　師団長の一件と言ひ、本出発時の態と言ひ深く反省すべき点　多々あるを認む。

三月二十四日　土　晴

反省すべき点　多々ありと認めつつも、そを実行に移し得ざるは余の最も欠点とすべき点なり。　隊員の志気を左右するは実にかかりて余一人の力にあり。隊員を喜びて死に導き行く力余に欠けたり。　隊員に優しすぎてなめられたりと　汝認めざるや。彼等は吾れの抱擁をけ破りて逃げ出でんとはする。　指揮は即ち力なりと言へる人あり。

嗚呼先発の住田隊、小野隊出発す。午後　整備、試験飛行、整々と行ひ得たり。予備士校にビツケせる者　実に八名を数ふ、余も又その一人なるも快なる事極み無かりき。　嗚呼余が修武の地を空から訪れ得ること喜びの限りなり。

（金文男、註）小林敏男は前橋予備士官学校を卒業せり

三月二十四日、第三十六、三十七、三十八隊の三隊は同時に前橋（堤ケ岡）より出撃の予定なるも、第三十七隊の飛行機、整備未了、出発を延期せり。

三月二十六日　火　晴

敵　遂に沖縄に上陸を開始せりとの報に接し、吾等の出発に大いなる意義を加えたり。

○九○○　始動出発せんとしたる時『新田原敵艦載機の襲撃を受く、と号第三十七飛行隊は大刀洗に向ひ進発すべし』との命を受く。

一○○○遂に前橋を発す。

思えば　愉しき二十日間なりき。　真白にぞ雪を頂きて、天聳ゆ富士ケ嶺の尊きに三嘆しつつ一路西下す。　浜松にて給油後　鈴鹿も難なく越えて一五○○加古川に全機無事着陸する。加古川中村家一泊、愉しき夕べなりき。

せまり行く　生命を思ひひもすがら
机に向ひ　航法計画を立つ
すつるべき　生命にあれど猶而し
惜しみて遂に究め得ざりき
吾が生命捧げむ秋の至れるを
心静かに思いて居るも
吾が生命捧げむは易し而れども
国救ひ得ざれば嗚呼如何にせむ

三月二十七日　水　曇

飛機整備　全からず、　出発若干遅延せるも一○○○　進発を決意して始動す。今出発線に就かんとせる時　大刀洗空襲中の情報に接し離陸を断念す。

午後空襲解除され、大刀洗未だ延焼中と知りつつも出発す。然るに余の飛機急に振動起こり、天候不良なるにより再び着陸　加古川に再泊す。

三月二十八日　木　晴

命あり、南九州より攻撃を敢行すべしと。　遂に時は至りぬ。嗚呼吾れが独り願へる如く吾が死場所は九州沖と定まりぬ。うれしき限りなり。

○八○○　加古川発　予定航路を一気に大刀洗に向け航進す。一○○○着六航軍に報告せるに　右の命を受けたり。　いろは旅館に落ち着き、甘木生徒隊を尋ぬ。牧さん、中田、岩田准尉、そして科長に会ふを得たり。

吾が第二の故郷、大刀洗は、昨日の爆撃にて無惨にも破壊しつくされたり。

而れども再び、大刀洗を訪れ得たる事、真に喜びの極みなり。

直ちに　小郡なる下宿を訪ぬ。皆人驚きて吾を迎へぬ。夜愉しき夜なりき。小郡四人組を家に呼びて対談す。吾れが心の何処にか強くきざみ込まれし……

……以下省略

三月二十九日　金　晴

命ある迄は、熊本に転進せよと。午前中モサモサして午後名残り惜しき大刀洗を去る。熊本に着きしに、直ちに隈庄に到るべしと。隈庄に展開完了。熊本にて一泊。吾が二十五年の尊き生涯、残す処四、五日なりと知りつつも、未だに心の動揺を認めず。　吾れが願ひは、只一つ任務の必達のみ。

『嗚呼　神よ　私の一生は本当に美しうございました』　隊員一同、昨夜も一昨夜も、そして今夜も人生最後の……

……以下省略

三月三十日　土　曇

桜、桜、嗚呼桜の花を遂に見るを得たり。最上とす。人生に対する何等の名残をも無し。小郡にては海の、あの香はしき薫りに接し、今は満開の桜を仰ぎ得たり。花を見つつ桜の散ると共に散華し得る吾が身の幸福をつくづくと感じたり。午前午後を通じ整備の完璧を期せり。

熊本へ連絡に行けるも、敵　艦載機来襲するとの警報ありて間もなく帰る。夜、三ケ月振りにて映画を見る。（米英撃滅の歌）なり。三人の女性あり、轟と、高峰と月丘なり。　柏木は轟を押し、佐々木は高峰に岡惚れなり。余は何とはなしに　月丘に心引かるるものを感じたり。月丘は静態的女性にして、言はば古き型の美人、何処とな

く、淋しさを持てり。依て余を、古き型の人間なりと、柏木は言へり。
余自身は極めて明朗にして、動的人間なるも、内的に何等かの淋しさを包含す。その点に於て何処か相通ずるものを月丘に見出せり。
轟の如き明るき動態的近代美人はヘドをはきそうなる程嫌いなり。高峰の理知的な美しさには、矢張り心引かるるものあれど、冷的な険を有するそれには近寄り難し。
命旦夕にせまるを知りつつも何等平常と変わる処なし。而れ共、一日でも長く生きんとする欲望は矢張りかくす事を得ず。吾れは聖人にあらずして只の凡人なり。

三月三十一日　日　晴

多々語らず。悲しめど、悲しみを、悲しみとせず。　而れども　重大なる事故を起こし神鷲と定まれる二人を殺したる事、天上に対し　深く、深く御詫び申上ぐ。
（吾等十二の若桜）の二人を失ひ憂いに苦しむ。　九名の部下を励まして、任務の必達に引つ張り行く事、余にかせられたる当面の重大なる任務なり。わけても柏木の悲しみに沈める様見るも惨めなり。
（金文男、註）この事故は昭和二十年三月三十一日、隈庄に於て　誠三十八隊の蕎麦田　水行少尉のプロペラにはねられ、誠三十七飛行隊の、石川伍長と、中村曹長が事故死したものである。
神は吾等に大いなる試練を与えたり。而るも　神よ、吾等を見捨て給ふな。
命あり、『誠三十七飛行隊は明、一日薄暮沖縄本島に近迫せる、敵船団を求めて突撃すべし』と。　夕　新田原に事故報告に行ける際、右の命令を受けぬ。　死は勿論決しているものの、修養の足らざる身には矢張りドキッとしたる身の緊迫感を感じたり。一時して命令は変更し、余等の攻撃目標は敵第二波船団と決定されぬ。八紘荘に一泊。
明　薄暮突入の命を受けたる三十九飛行隊員と寝を共にせり。

命あり明一日薄暮
船団求めて突撃せよと
一百五十の船団ひたに迫り来と
聞きて遂に吾れたじろがず
大命を拝せしやりぬ　喜びよりも
緊迫感をただ感じぬ
薄暮き光の下に開けたる
沖縄の地図は目に痛しも
船団の位置を赤鉛筆で記入せり
此処ぞ吾等がおくつきどころ
参謀の与える注意聞きつつも
胸とどろきて半分は知らず

四月一日　月　晴

嗚呼桜何と美しき事よ、吹く風に、はらはら散る桜眺めつつ、暖けき心の喜びを感じぬ。
朝、双練にて隈庄に帰り、直ちにキ36にて熊本に行く。午後は何もせず早く帰る。佐々木と共に映画に行きて寝る。
（註）キ36…98式直協偵察機

四月二日　火　晴

午前整備　連絡に行ける柏木少尉、新田原より帰る。増加タンクは菊池に於て行ふべしと入江、玉野、赤峰を行かしめ午後は訓練を行ふ。
状況をもうけ、海上の船舶を実戦的に攻撃せしむ。得し処のもの多々在り。
夕食後、柏木、春島と共にビヤホールに行きて大いに飲みぬ。いくら飲みても酔はぬ身の余なれど、この夜は確かに酔いたり。「東亜」に於て一人四、五本も飲みたるか。後春島と別れ、柏木と共に一昨々夜訪れし「共栄」を訪ぬ。此処に於て、更に一本を飲む。酒飲めば理性は乱れ、心中深くひそめる野性逐次現れぬ。時に気付き驚く事もあれど、後四、五日の生命なればと言ふ考え起こり来て、再びも野性に還りぬこの気持ち、隊長たる余に於てすら然り、隊員一同のかくあるべきは論無し。余をかくも共栄に引きとどむるもの、一に「みどり」の魅力なり。　恥ずかしくはあれど、野性に還りたる余は矢張り一個の男なり。
（以下省略）

四月三日　水　曇時々晴

午前中航法計画、戦闘教令、その他の学科を行ふ。佐々木機、小屋機、藤沢機を菊池へ行かしむ。新田原連絡の柏木機天候不良の為引返へせり。
午後を予定せる訓練も中止す。
夜の町を再び柏木、佐々木と共にさまよいぬ。最早あの家は訪れまじと心決めして居りしものを、誘はるるままに、然しも内心何等かの喜びを秘めて遂に門をくぐりぬ。
ビールを十二、三本飲みて又昨夜の如く酔ひたり。
（以下省略）

四月四日　木　雨後曇

隊員の半数を休養せしめ〇七〇〇飛行場に到る。　増加タンク施置（マヽ）の為三機を菊池に行かしめ午後早く退庁す。美しき音楽にひたりたき衝動にかられ明るい中より外に出づ。
レコード屋に行きしも適当なる盤を求め得ず。　折柄　来合わせし竹内氏に

誘われ、彼の家を訪れぬ。この夕べこそ昨夜まで、下界に遊べる余を天上に引き上げたる愉しき宵なりき。第五、シューベルトのリード、ショパン のピアノ、信時潔の沙羅等々。

ああ、何と美しき事よ。音楽こそ余の心にうつる喜びを与える唯一の武器なり。二一〇〇彼の家を辞す。

床に入りて「みどり」に会はざりし淋しみをつくづく感じぬ。余と雖矢張り只の凡人なり淋しく睡る。

（金文男、註）この抜粋したる日誌の中にも終日隊員である柏木誠一と、行動を共にした様子が窺われる。尚隊歌の作詩作曲等も茲に於て明確となった。また明野で編隊訓練中僚機が長機の尾部を云々……四月三日の木脇訪問の飛行等は日誌の前後からみて確信を得ず。

四月五日　金　晴（金文男註、この五日の記録余りにも、字は乱れ判読困難の点あり）

菊池飛行場より飛機にて隈庄に到る。命あり、明薄暮突撃を敢行せよと命を拝して、吾れに感無し。桜花散る　此の時　散り得る身の幸福をつくづく感じぬ。

凡人　敏男の散るべき時は遂に来たりぬ。

夜　会食を行ふ。共栄の諸姉訪れくれぬ。愉しき最後の宵なりき。余の日誌を「みどり」に託す。人生は美しう御座いました。

（金文男、註）隊歌その他に就いてのこと

二月十七日大刀洗校に編成された隊、第三十六、三十七、三十八隊は、恰も兄弟の隊とも言えるもので、隊歌は水戸藩の家臣を継ぐ、小林敏男の作詩は記録により、明確であり、誠第三十六隊員、岡部三郎　の遺稿から察して考えられるのは……この大刀洗校編成の三隊の、士気高揚として共通の隊歌である如くに感じられる。然し誠隊を冠する特攻隊は他に十六隊あり、従って誠隊歌と言うより、第三十六、三十七、三十八隊の歌と解すべきか。

当時を偲びて何卒本遺稿により縷々推察を願う次第なり。

終わりに

昨平成元年炎暑の候　木脇に在隊せる朋友を尋ねおりし頃に、偶々野村潔様より同期、朋友小林敏男兄の母堂、小林鈴様の居所連絡を戴き、早速東瀬兄と同道致し、お慰めをすべく訪問せるは、九月十五日なり。初めての訪問なるも、母堂鈴様は、息子が帰り来る如き心境なりと、延々二時間半もお邪魔を到せり。母堂の話尽きたることなし。その折り、息子敏男の残せる、昭和二十年一月より四月六日出撃前日まで、書き留めたる日誌ありと、然れどもその貴重なる遺稿は只今、手元になし。甚だ残念なり。熊本に在住せる人物、竹内某氏が保管すると思はれるも連絡はとれずと母堂の言葉を一縷の望みと、熊本竹内某氏を尋ねること半歳有余にして去る五月十六日に竹内氏と接触し一時は幻の如きなりし小林敏男遺稿集を発見せり。　快哉

平成二年五月十六日

（前列右より）赤峯伍長、藤沢軍曹、入江伍長、石川伍長、小屋軍曹、（後列右より）百瀬伍長、玉野軍曹、春嶋少尉、小林少尉、佐々木少尉、中村曹長（列外）柏木少尉

特攻隊絵葉書発行に因んで②
―それらの絵にひそむもの―

田中　賢一

前号でも申したことですが、航空特攻、空挺特攻、水上特攻、水中特攻のそれぞれ象徴的場面を現す八枚一組の絵葉書を、作製して頒布しておりますのは、会員の皆様にその一枚一枚を郵便葉書として使用して頂き度いからであります。現在我が協会の会員は約三千名でして、この会報もその数だけ発行して会員に郵送しています。僅か三千名、しかもその大半が老兵ですが、その人達の目にとまるだけというのは、甚だ物足りないことで何か空しい感さえ致します。慰霊とは何かと考えてみまするに、慰霊祭をやり玉串を奉ったり、焼香したりすること勿論結構ですが、それが死んだ戦友に申訳ないという己の気持ちを、晴らすだけで終ってしまっては、逆にこちらが慰霊されているようなものです。後に続く者を信じて往かれた英霊、就中戦没特攻隊員に対する慰霊は、その精神を確かと後世に伝えること以外にはないのであります。

昔だったら修身の教科書に載るような事例は、無数にあるにも拘らず誰も教えようとしません。それもその筈現在社会の中枢にある者が、戦後の誤った教育を受けて育っているので、特攻精神など知る由もないし、知ろうともしません。

かくばかりみにくき国となりたれば
さ、げし人のただにをしまる

ある戦死者の妻の詠んだものだと聞きますが、まことに身につまされる歌ではありませんか。英霊は仰っしゃるかも知れません〝こんな世の中になるならば、志願して特攻隊員になるではなかった〟と、そう言はれると我々は唯々非力を恥、頭を下げるだけであります。

今般絵葉書を発行した所以のものは、特攻隊という世界に類をみない憂国の士が、半世紀前の我が民族の中にいたということを、年輩の人には思起してもらい、若い人には知ってもらう端緒としたいからであります。昨年中にこの絵葉書は2千組出ました。入手した人が全部郵便はがきとして使って下されば、1万6千人に届いたことになりますが、意のあるところをお汲みとり下さい。一人で40組注文なさった方があると聞きました。（手渡し一組400円、郵送500円、二組以上郵送料は実費、一〇組以上二割引で頒布しています。）

ところで、葉書タイプにした為僅か二行の説明で舌足らずも著しいものがあります。そこで会員に対してはこの連載記事をもって解説していますが、一般向けには別途解説書を作ることにしています。

空挺特攻

空挺特攻の代表として採用した構図は、義烈空挺特攻隊員が故郷に向って頭を垂れ、別れを告げている絵であるが、これは小柳従軍カメラマンが撮った写真を、松本画伯（当協会会員）が絵に直したものである。作為した構図ではない。靖國神社の遊就館特攻展示室には、これを型取ったレリーフがある。

義烈空挺隊については、昨秋ビデオを作成しそのナレーションの全文を次回の会報に掲載するので、ここでは述べないが、どんな気持で故郷に別れを告げているのか、その心情の現れている言行の二、三を紹介しよう。

奥山隊東郷勝曹長の書き残したノートがある。美しい筆文字で書いてある

可愛い妹弥生ちゃんへ
兄さん兄さんとあれほど慕ってくれたのに
何等兄らしい事もできず
御国のために再び南海の戦場に行きます
お母さんやお姉さんのおしえをよく守って
一生けんめいお勉強して立派な人になって下さい
そしてお母さんに孝行なさい
睦ちゃんと仲よくね
兄さんも弥生ちゃんのお勉強に負けないように
手柄をたてて
ラジオにてお伝え致します

それを楽しみに待ちなさいね

この文章はサイパン攻撃の準備中に書いたものらしく、それが取りやめになったのでそのまま残ったものと推察する。次の歌も書き残されている。

還り来ぬ身にしあれども父母に
告げずに行かんやまと男子は

伊藤整軍曹が陸軍罫紙に認め、留守担当部隊に引継ぐ私物箱に入れてあった紙面には

〝かほるが念願の日が遂に来ました本当にこの日をどんなにか待っていたか知れません。御母様、かほるの気持ちを汲み取ってきっと喜んで下さい。

咲いた花なら散らなければなりません。立派な花を咲かせて御覧に入れます〟

とある。日付は沖縄特攻の内示を受けた四月五日となっている。

関三郎軍曹は遺髪と遺爪を同封し、次のように書き残している。

〝大命降下勇躍征途に就きます。今までの重々の不孝は何卒御許し下さい。いさぎよく散る覚悟です。

何も思い残すことはありません。
よしや身は千々に散るとも
来る春に
また咲き出でん靖國の宮〟

皆このような気持ちで故郷に別れを告げたであろう。それがこの絵である。

空挺特攻にはこれ以外に薫空挺隊と高千穂降下部隊がある。前者についてはこの会報22号（H7・2）に詳しく載せておいた。詳しくと申しても写真を入れて七ページに過ぎない。義烈空挺隊に比べて入手できた資料は極めて少ない。中重夫中尉の指揮する遊撃第一中隊の一部と、それを載せて征った二〇八戦隊のDC3四機、桐村浩三中尉以下九名を合せて薫空挺隊と呼ぶ。中重夫中尉以下搭乗部隊の母隊である遊撃第一中隊は、将校・下士官及び通信手・衛生兵以外の兵は全部台湾の高砂族である。薫空挺隊に選ばれた者六一名のうち四八名は高砂族である。階級は皆上等兵と記録されている。靖國神社御祭神名簿には日本名になっているが、留守担当者の欄を見れば高砂族のことは明瞭である。

中重夫中尉が自分の写真の裏に書き残した歌をもって、この人達の精神を偲ぶことにする。

身はたとへ敵の真中に散りぬとも
魂はとどめて皇国護らん

空挺特攻のもう一つは高千穂降下部隊である。レイテ作戦でブラウエン等脊梁山脈以東数個所に12月6日降下した部隊は、最終的に一人の生還者もないが、この約五百名を全部特攻隊とみなすことはできない。主力は山越えに進出する第26師団と提携する計画だった。しかし敵航空の跳梁を封ずる為、東海岸のタクロバンとドラグに向った部隊は、地上部隊がそこまで進出する見込みは全くなかったので、特攻隊ということで出撃して征った。これらのことは会報12号（H3・2）、13号（H3・7）及び22号（H7・2）に載せておいたので参照され度い。降下部隊が出撃前宿舎としていたクラーク地区南サンフェルナンドの精糖工場の壁に、誰が書き残したか、

花負いて空うち征かん雲染めん
屍（かばね）悔なく吾等散るなり

とある。

回天

特攻専用の最初の兵器、回天

飛行機では通常の用途の機体がそのまま特攻に使用された。特攻専用の「剣」などが試作されたのは、戦争が最終段階に入った時期からである。特攻の為だけの兵器として、最初に採用、製作されたものは回天であった。

「人間魚雷」の構想は、部内各方面からの意見具申、血書嘆願にもかかわらず、必死兵器を否定する海軍上層部が却下したため、永く実現を見なかったが、昭和19年2月、ようやく試作を認められ「〇六金物」として同年7月に実験艇が三隻、完成した。8月1日には正式兵器に採用されて「回天一型」との命名を受け、ここに回天が誕生した。山口県徳山湾外大津島の魚雷試射場を基地化し、9月5日から搭乗訓練に入っている。

飛行機特攻の第一陣とされる「神風特別攻撃隊敷島隊」が比島の戦場で編成され、爆装ゼロ戦五機をもって出撃したのは昭和19年10月25日であったから、これをかなり遡る時期に、国内では既に「特攻」が始動していたことになる。

因みに、一人乗りの爆装高速艇「〇四」は、昭和19年4月の軍令部総長からの特殊兵器実験製造の提案に基づくもので、同年5月27日に試作艇が完成、8月28日兵器採用となり「震洋」と命名された。また、人間爆弾とも言うべき「〇大兵器」は試作命令が昭和19年8月16日であり、早くも8月28

日、「桜花」の名で兵器に採用された。

特殊潜航艇「甲標的」は大東亜戦争劈頭から「特別攻撃隊」として実戦に参加したが、「本来、生還を前提とした、小型の潜水艦である。従って特攻兵器ではない」という主張が、特潜会の一部の人々にある。

回天兵器の概要

回天は、直径61センチの九三式酸素魚雷の前半分を直径一米の円筒で包み、中に純粋酸素を二二五気圧まで圧縮して詰めた気蓄器を魚雷一本分、更に積み足し、頭部には一・五五トンの炸薬を装塡して、全長約15米に収めたものである。全重量8トン。

中央の操縦席に搭乗員が一人座り、潜望鏡で観測しながら操縦する。魚雷は元来、自動操縦で走るように出来ているから、その針路、速力、深度の各調定装置のダイアルを操縦者がセットすれば、そのとおりに進んでくれる。但し、潜望鏡を通した短時間の観測で、敵艦の針路、速力、距離に応じた射角を決定して、諸元を調定し、一方高圧酸素を消費するにつれて刻々変化する浮力や釣合いを常に調整して自在に走り、必ず命中するためには相当の研究、熟練が必要である。艇内の操作は種類が多いので、窮屈な座席の中で結構忙しい。搭乗中は休みなく、頭と身体を動かしていなければならない。

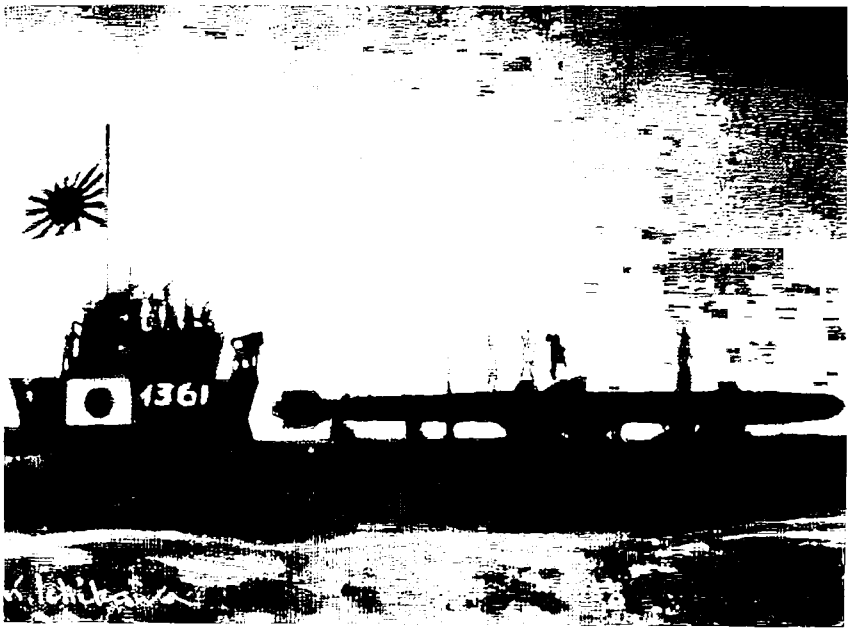
突撃時の速力は30ノット。潜水艦から発進して敵艦に近づくときの速力が20ノットであるから、訓練中にうっかり秒時計から目を離していると、岩や目標艦に衝突しかねない。外界が見えるのは、水面に浮上する僅かな秒時の間だけで、あとは計器だよりの暗闇疾走である。一瞬のミスが生命を奪うので、訓練中でさえ心身を擦り減らす、烈しいものであった。

回天の使用方法

絵葉書「特攻戦没者顕彰の栞」に収められた「人間魚雷回天」の図は、回天を搭載した伊号第三六一潜水艦が基地を出撃して行く光景を描いたものである。搭乗員たちが、回天の背中の上に立ち、見送りの歓呼に応えて日本刀を打ち振りながら、再びは還ることのない壮途に出で発つ姿である。

回天は当初、大型潜水艦の後甲板の上に四艇、のちに前後甲板に合わせて六艇を搭載した。輸送型潜水艦の場合は五艇であった。最初は、南洋の環礁、港湾内に集結した停泊中の敵艦隊を奇襲攻撃したが、あと洋上を航行する輸送船団に攻撃目標を転換して、終戦のときまで戦い続けた。

搭乗員は潜航中の潜水艦の中から交通筒を通って回天に乗り込み、艦長の命令によって発進、指定された方向と距離に従って突撃してゆき、最後は搭乗員自身が浮上、観測して敵艦めがけ全速で突入する。外れたら、命中するまで繰り返すのである。



作戦に投入された回天搭乗潜水艦は合計10隊、16隻、出撃回数延べ32回であった。この潜水艦による回天作戦で出撃した搭乗員は延べ一四八名。内八〇名が戦没した。喪失潜水艦は8隻に及び、乗員八一〇名が戦死した。

本土防衛のため陸上に設けた基地から発進してゆく基地回天隊も、次々と編成されて配備についた。終戦までの戦没搭乗員は九名であった。

回天の効果

回天が挙げた戦果としては昭和19年11月21日、ウルシー環礁を奇襲した回天特別攻撃隊の第一陣、菊水隊により艦隊随伴油送艦ミシシネワが大爆発を起こし炎上沈没した。7月には多聞隊の回天が米国駆逐艦アンダーヒルを撃沈した。これら

二件はどの戦史書にも明記されているが、ほかに撃沈二隻、撃破四隻以上の戦果が各種戦史に記載されている。しかし多数の回天が投入された洋上攻撃で、目標とした輸送船団に与えた戦果は、潜水艦側が目撃しているのに、米軍の発表がこれまで一切ないために、今なお調査の段階にある。

回天搭載潜水艦が魚雷発射で挙げた戦果も、原爆を運搬した重巡洋艦「インディアナポリス」の撃沈などが知られている。

洋上襲撃に移行して後は、回天を搭載した潜水艦は飛行機に沈められた二隻以外、敵水上艦艇との交戦によって沈められるものは皆無となり、奮戦を続けた。

第九五機動部隊を指揮したオルデンドルフ少将は「戦いを継続してゆく上で、回天は最大の脅威となっていた。日本本土を基地とした回天が実際に使用されていれば、連合軍側の侵攻部隊に対して甚大な損害を与えていたであろう」と、回天特攻について論評している。

心理的な効果として「水中から何時襲ってくるか分からない、姿の見えぬ敵」に米軍の抱いた恐怖感は大きく、種々な場合にそれが現れている。八丈島にいた私ども第二回天隊も、終戦後に武装解除にやって来た米国艦隊から、警戒感に併せて尊敬と、誠に丁重な待遇を受けた。

回天搭乗員の心情

回天の搭乗員たちが特攻を希望し、更に出撃を熱願してまでも還らぬ途に就かせた動機は、一体何だったのであろうか。

兵科四期予備士官であった久家稔大尉は、回天特別攻撃隊轟隊の伊号第三六潜水艦が搭載する回天六基の搭乗員の一人としてマリアナ海域に出撃した。20年6月28日、敵駆逐艦の猛烈を極めた爆雷攻撃を繰り返し受け、潜水艦が絶対絶命となったとき、故障した人間魚雷に乗り込んで強行発進して、見事に敵艦を殪すとともに母潜水艦を救った。

昭和19年11月21日菊水隊のウルシー環礁攻撃により炎上する油槽艦ミシシネワ号

久家大尉の19年8月の日記には「俺達は、俺達の親を、兄弟を、姉妹を愛し、同胞を愛するが故に、彼等を安泰におかんが為には、自己を犠牲にせねばならぬ。祖国敗るれば、親も同胞も、安らかに生きてゆくことは出来ぬのだ。我等の屍によって祖国が勝てるのなら満足ではないか」と記されている。

回天搭乗員たちの気持ちは正しくこの通りであった。特攻志願より散華のときまでの長い日月の間、揺るがぬ信念を支えた、より身近かな心情は、事ここに至った今、自らの親兄弟、それに連なる麗しき日本の民族、美しき日本の山河を滅亡から護り、平和な日本としてこの地上に残すために、若人達の採り得る最も効果的な手段は、我が身を必中の弾丸に代える特攻であるとの判断であったと考える。大いなるものへの愛の献身であると言えよう。

回天の搭乗員の人数と構成

回天に献身しようと志願して訓練基地に集まった搭乗員は一、三七五名を数える。

その出身別構成、および戦没者数とその比率は左表のとおり。

出身	搭乗員数	戦没者数	戦死率%
海軍兵学校	八九	一九	二一
海軍機関学校	三二	一二	三八
計	一二一	三一	二六
予備士官兵科三期	二二	一一	五〇
同　四期以降	一八八	一五	一一
計	二一〇	二六	一二
一般兵科	九	九	一〇〇
甲種飛行予科練習生	九三五	四〇	四
乙種飛行予科練習生	一〇〇	〇	〇
計	一〇三五	四〇	四
合計	一三七五	一〇六	八

回天の黒木少佐と第六潜水艇の佐久間艇長

小灘利春

人間魚雷の着想

第二次大戦の戦局が急迫するにおよび、人間が魚雷に乗って敵艦を水中から攻撃する発想が各方面で生まれた。

昭和18年、呂号第一〇六潜水艦の水雷長であった竹間忠三大尉は「人間魚雷による肉弾攻撃のほか、戦勢挽回の方策はない」と、大本営潜水艦担当参謀に意見書を提出している。竹間大尉はそのあと、呂号第一一五潜水艦の艦長となって戦死した。（以下当時階級）

同年暮れ、伊号第一六五潜水艦の航海長、近江誠中尉もまた敵のレーダー、ソナーが発達したために苦境に立った潜水艦が、自らを守り、戦い続けるための反撃手段として、「潜水艦に搭載する人間魚雷が必要である」と、血書して連合艦隊司令部に送った。近江中尉は、人間魚雷「回天」の訓練部隊となった第一特別基地隊（大津島分遣隊）に配属され、大尉の最先任搭乗員となった。終戦は第二三突撃隊の特攻隊長兼回天搭乗員として、高知県の海岸で迎えた。

巡洋艦摩耶の乗組であった橋口寛少尉もやはり、後に実戦に使用された回天と同じ構造の人間魚雷に着想、一九年初め頃より度々採用の請願を繰り返していたが、同年8月、軍機兵器として別な経路で既に実現に向かっていた回天部隊、一特基へ転属を発令された。彼は搭乗員として出撃する直前に終戦を迎え、回天の艇内で自決を遂げた。

駆逐艦桐の水雷長、三谷与司夫大尉もまた、「九三式酸素魚雷の卓絶した性能を活かす機会が無くなった。この魚雷に自分が乗り込んで体当たりする他ない」と考え、血書して人間魚雷採用の意見を海軍省に提出、回天の搭乗員となった。

そのほか現地部隊で、魚雷に人間が乗り操縦できるように改造したもの、水中を潜航する艇体を新たに製作し、人が乗って攻撃しようとしたもの等が現れている。

日本海軍は伝統的に「決死隊」は認めても、「必死の兵器」は許可しなかった。それなのに、生きて還ることのない「人間魚雷」の構想を、幾多の困難を超えて後に実現まで漕ぎ付けた上、訓練の先頭に立ち、殉職した人物が、甲標的（特殊潜航艇）艇長の黒木博司少尉であった。

黒木少佐の殉職

昭和17年、潜水学校卒業にあたり、海軍機関学校五一期の黒木少尉は、主任教官、校長に甲標的乗員を請願して動かず、異例ながら熱意を認められて機関科では初の艇長講習員となった。呉軍港に近い倉橋島の大浦崎にある通称「P基地」が、甲標的を建造し訓練する基地であり、後に第一特別基地隊（本部）となった。

早速、黒木少尉は機関科士官の本領を発揮して、初期の動力源が電池だけの、二人乗り「甲標的甲型」に、ディーゼル機関と発電機を付けて行動範囲を広げた「乙型」の建造について意見を開陳した。これを改良、大型化した「丙型」、さらには航走充電を容易にして、航続距離を飛躍的に伸ばした、五人乗りの「丁型（蛟龍）」も計画している。

18年8月、潜水学校を卒業して甲標的に着任し同室となった兵学校71期の仁科関夫少尉と協力して、直径六一糎の九三式酸素魚雷を活用する人間魚雷の構想を摑んだ。必死戦法に反対する部隊長山田薫中佐と、「特潜ではもう間に合わない」として激論を戦わせたが、その指示を得て18年12月上京、海軍省軍務局員で潜水艦戦備を担当する吉松田守中佐を訪問し、「一人一艦、体当たり撃沈して難局を打開する方策」としてこの兵器の採用を懇請した。しかし「必死」の兵器は採り上げるところとはならなかった。

2月、再度上京、陳情したが、折しもクェゼリン環礁を占領され、戦局は要衝トラック島が大空襲を受け潰滅的打撃を被る事態にと、悪化の道を辿っていた。遂に実験艇の試作にまで漕ぎ付けたのであるが、試作の人間魚雷も、条件とされた脱出装置の技術的困難から頓挫しかけたとき、脱出無用を主張して、ようやく兵器採用が実現するに至った。

しかし、山口県徳山沖の大津島に開設されたばかりの基地で19年9月、搭乗訓練開始の翌日に黒木大尉の艇は海底に突入し、無念の殉職を遂げた。

佐久間艇長の殉職

日露戦争中の明治37年に起工、戦勝後の39年に竣工した、僅か58トンの国産第一号の潜水艦「第六潜水艇」は、明治43年4月15日、広島湾新湊沖で実験潜航中、事故により沈没、艇長佐久間勉大尉以下一四名の全乗組員が凄烈な殉職を遂げた。

同日〇九四五、母艦歴山丸を離れ、

艇の上に立てた通風筒を通して空気を取り入れながら、主機であるガソリン機関を運転し潜航する実験を一〇〇〇から開始した後、その通風筒から海水が侵入して、浮力を失った艇は10尋の海底に沈んだ。

電灯は消え、悪ガスが発生して、呼吸が苦しいなか、司令塔の覗き窓から漏れるわずかな光を頼りに艇長は詳細な遺書をしたためた。

ようやく艇を引き揚げハッチが開かれたとき、乗組員の一四名は一糸乱れず配置に就いたまま、絶命していた。

艇長の遺書は、「小官の不注意により、陛下の艇を沈め、部下を殺す。まことに申し訳無し」に始まり、

① 全員が職を守って、沈着に事を処したこと。

② この事故により、潜水艦の将来の発展を阻害することのないよう

③ 事故の原因と発生後の詳細な経過、執った処置

④ 平素の乗員指導と今後の乗員採用方針についての意見

⑤ 部下の遺族をして窮するものなからしめ給らんことを、と配慮を要請

⑥ 上司、先輩、恩師に別れを述べ

「一二四〇なり」と記して筆を絶っている。

その前、欧州で発生した潜水艦の沈没事故では、乗員が我れ先に脱出しようとして出入口に殺到し、折り重なって斃れていた。その醜状とは全く異なり、第六潜水艇の乗員は死に至るまで、沈着に持ち場を守って乱れることなく、従容たる最後を遂げていたのである。その事実、さらに艇長の遺書が公開されると、欧米各国の海軍はもとより、全世界に深い感動を呼び起こした。

第六潜水艇は呉の海軍潜水学校の校庭に置かれ「六号艇神社」となった。記念碑が広島県との県境に近い山口県新湊と、呉市内の鯛乃宮神社にあるほか、佐久間艇長は銅像が福井県小浜市の、維新の志士、梅田雲濱の碑がある小浜公園に建立され、生地若狭の三方町、佐久間神社に祭られて、共に現存している。

この遺難事件は、かって軍歌に歌われ、また戦前は修身の国定教科書に「沈勇」の題で掲載されていた。戦後の日本では顧みられることは稀であるが、海外では今なお佐久間艇長の声価は高い。

二つの遭難事件の状況

これら二件の事故は、状況が非常に似通っている。ともに新しい兵器の開発初期の段階で発生した沈没事故であった。

第六潜水艇は、水中に潜れるだけという時代の潜水艦で性能が低く、水中速力三ノット、水中航続力は三時間程度と、実用性のない短時間であったから、現在のシュノーケル装置にあたる潜航持続時間の延伸策、および水中速力の向上策が当然、考えられた。

しかし、第六潜水艇の段階の性能では、通風筒の先端だけを海面上に出して航走するなどと言った微妙な操縦は、実際は極めて困難であったと思われる。通風筒の高さ以上に深く潜るときは、鎖を牽いてスルースバルブを閉鎖するのであるが、この潜航中、通風筒が水面下に没して浸水したとき、バルブの鎖が切れた。手で急ぎバルブを閉鎖したが及ばず、浸水多量となって沈没したものである。

危険な実験ではあるが、新兵器潜水艇の発達、実用化の為には「通風筒を使ってガソリン潜航」に取り組むべき必然性が当時、あったのである。

黒木博司大尉が殉職したときの乗艇は、これまで誰も触れた人はいないが、兵器に採用された量産型の「回天一型」ではなく、実験的に作られた最初の試作品「〇六金物一号艇」であった。昭和一九年八月一日、兵器採用の決裁とともに、呉海軍工廠に対して「八月末までに回天一〇〇基を急速生産せよ」との至上命令が出された。戦艦大和ほか多数の巨艦を建造した東洋一の大造船工場であるから、容易に達成できる筈である。それなのに、9月5日の訓練開始までに出来上がった回天は、何と「ゼロ!」だったのである。待望した兵器はその後も暫くの間、基地に姿を現さず、私ども搭乗員は怒りで、はらわたが煮えくり返る思いであった。

「誰の責任か?」は別としても「取り返しのつかぬ怠慢であった!」と考える。性能の不充分な試作艇、それも装備がそれぞれ異なる三隻だけしかなく、黒木大尉をはじめ搭乗員として大津島に集まった三四名のわれわれ青年士官は、ともかくこの体制のままで訓練に挑み、操縦技術を開発するほかなかった。

戦雲急を告げる折り、人間魚雷の戦力化は何よりも急務であった。大津島基地の活動開始翌日の九月六日夕刻、風浪が強まるなか、搭乗は始めての兵学校七〇期、樋口孝大尉が操縦し、黒木大尉が指導官として同乗して17時40分、訓練に入った一号艇は、白波のなかに姿を消して海底の砂泥に頭部を突っ込み、浮上しなかった。

二つの遺書

黒木大尉の遺書の内容は「18時12分、樋口大尉操縦、黒木大尉同乗の第1号艇、海底に突入せり。前後の状況および所見次の如し」として、

① 事故発生の状況を経過を追って詳述
② 事故発生後の応急処置
③ 事後の経過
④ 所見（事故防止対策、事故発生時の対策、反省、恩師、先輩への感謝など）
⑤ 追伸として装備改善策、後事の依頼

次いで、辞世、遺品の処置を述べ、家族に別れを告げ、

「二二〇〇壁書す。天皇陛下万歳、大日本万歳、帝国海軍回天万歳」と記し、署名している。絶筆は（7日）〇六〇〇であった。

この黒木大尉の遺書は多くの刊行物に紹介されているが、この遺書には前記の佐久間艇長の遺書に倣ったかのように、多くの類似点が見られるのである。黒木大尉は旅順口閉塞の決死隊、広瀬武夫中佐を日頃尊敬し、その名が遺文にいろいろと残されているが、佐久間艇長を語る言葉は見受けられないようである。しかし、日本潜水艦の歴史に不滅の名を残し、全乗員の模範として敬慕された佐久間艇長が、黒木大尉の行動の根源にあったことは疑いないところである。はからずも同じ事態に立ち至ったとき、自然に同様な行動となり、同様な遺書となって現れたものと理解される。

沈んだ水深もまた、黒木大尉が記録した「深度一八米なり」は第六潜水艇が沈んだ水深、一〇尋と一致する。徳山湾内で突入した地点の水深は、同夜の高潮時、艇内の深度計が示したと思われる一八米になることを、当時の潮汐表を捜し確認することができた。何の因縁が繋がっているのか、運命の符合を覚える。

双方の遺書とも、事故から教訓を得て再発を防止するよう、対策事項を苦しい状態のなかで整理し、綿密に書き残しているが、最大の懸念事は、いずれも事故によって潜水艦の、あるいは回天作戦の、必要性が見誤られ、発展を阻害するのではないか、の一点であったと思われるのである。

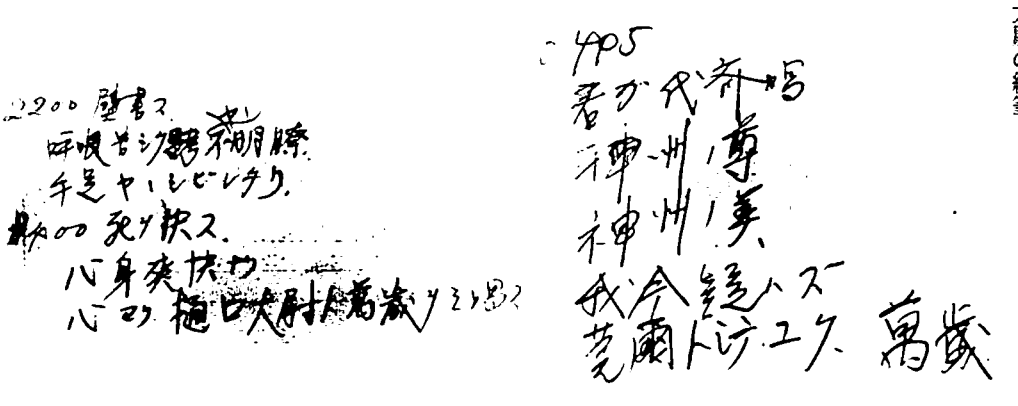
佐久間艇長は「我等は国家のため職に斃れしと雖も、唯々遺憾とする所は、天下の士は之を誤り、以て将来潜水艦の発展に打撃を与うるに至らざるやを憂ふるにあり」と、誤解なく研究に全力を尽くすよう望んでいる。

黒木大尉（没後少佐）もまた、「今回の事故は小官の指導不良にあり。何人も責めらるることなく、又これを以て〇六の訓練に聊かの支障なからんことを熱望す」「必ず神州挙って明日より即刻体当たり戦法に徹することを確信し、神州不滅を疑わず、欣んで茲に予て覚悟の殉職を致すものに候」と記し、加えて樋口大尉（没後少佐）も、「犠牲を踏み越えて突進せよ」と書き残したのである。

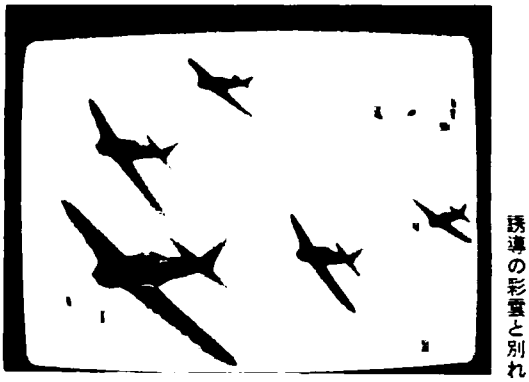
佐久間艇長の精神は、日本の潜水艦関係者全員を導くものとなった。第二次大戦で用兵不適切などに災いされ、戦果は期待に及ばないまま潜水艦一三一隻が戦没、一万余人の乗員が戦死した。しかし、生死を超越して最後まで各自の任務に最善を尽くす、第六潜水艇以来の潜水艦の不滅の伝統を守って、全乗員が敢闘した。

黒木少佐の殉職もまた、人間魚雷搭乗員たちの発奮を呼び、昼夜を分かたぬ猛訓練に突き進む起爆剤となった。

国家のための緊要と判断し、信念をもって使命に取り組む彼らの壮烈な殉職は、悲壮ではあったが、日本海軍、更に水中特攻部隊を奮闘に導く大きな原動力となって行ったのである。



海底に沈んだ魚雷の中で残した黒木大尉の絶筆。



誘導の彩雲と別れ

B29を銃撃

我が協会作成のビデオ
二つの特攻隊物語

第一御楯特別攻撃隊

サイパン基地のB29の我が本土に対する爆撃は、19年11月24日から始まるのであるが、それより先11月1日から度々偵察に飛来している。それに対し陸海軍航空部隊は、11月2日以降硫黄島中継で少数機をもって夜間爆撃を数回実施している。しかし、夜間の為戦果はよく確認されていない。海軍の第三航空艦隊では、この爆撃行に飽き足らず、特別に編成した零戦隊をもって、基地に在るB29を昼間銃撃することを思い立ち館山で準備を進めた。

第一御楯特別攻撃隊（隊長大村謙次中尉72期）と呼ばれたこの部隊は、零戦12機をもって11月27日硫黄島を発って、サイパンアスリート飛行場に向うのであるが、三航艦の計画では二回銃撃したら引返し、当時まだ我が守備隊のいるパガン島に不時着すれば、潜水艦で救出することになっていた。ところが全員燃料弾薬の続く限り攻撃する決意で飛び立ち、全機未帰還となった。零戦隊を途中まで誘導した上、戦果確認に任ずる為、偵察機「彩雲」2機が同時に発進する。1機は未帰還となり、他の1機の乗員の一人西村友雄氏が口述するがその回想は感銘深い。

あらゆる機会を捉え
多くの人に供覧され度い

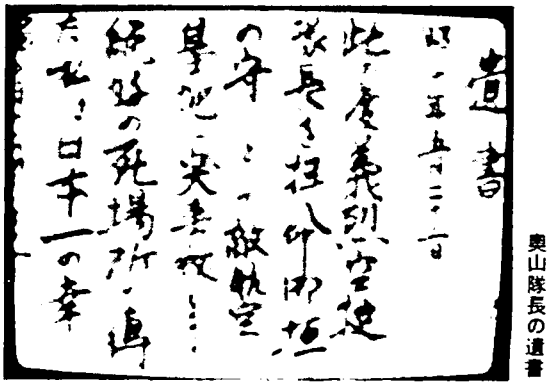
義烈空挺隊

敵が沖縄本島に上陸したのは20年4月1日である。我が航空部隊は九州に展開した第五航空艦隊と第六航空軍、台湾に在る第八飛行師団であるが、敵艦船に対する体当り特攻を主軸とし、ここを先途と戦った。ところが沖縄本島の読谷、嘉手納の両飛行場を早々に敵手に委ねてしまったので、そこを根據とする敵戦闘機の為、我が特攻機は目標海域に到達するまでに要撃されてしまう。そこで一時的にでもこの両飛行場を制圧しようと、義烈空挺隊の登場となる。義烈空挺隊とは奥山道郎大尉53期の指揮する挺進第一聯隊の一個中隊と、諏訪部忠一大尉54期の率いる第三独立飛行隊九七重12機より成る部隊で、19年末サイパンのB29の基地に特攻攻撃を準備したが戦機を逸し、その後訓練に励んでいた。

20年5月24日夕刻、熊本の健軍飛行場を発って沖縄に向うのであるが、出撃前の各場面を印象深く描写しており観覧者に多大の感銘を与えた。

両者を一巻に収めたこのビデオは、五千円（送料二七〇円）で頒布しています。事務局に申込まれると郵便払込用紙同封して現品を送ります。

搭乗前奥山と諏訪部握手



遺書

奥山隊長の遺書

特攻隊のビデオを見て

今般我が協会が作成したビデオ第一御楯隊・義烈空挺隊を見て、次の人達から所感が寄せられたので、ここに全文を掲載させてもらう。

個々の標題は文意を体し編集者がつけたものである。

一、日本会議事務局員から

註　日本会議とは従来あった「日本を守る会」と「日本を守る国民会議」が統合し、昨年5月発足した国民運動の組織であって〝私たちは美しい日本の心を伝える為、さまざまな文化事業に取り組む〟と宣言している。我々は特攻隊員の精神こそ〝美しい日本の心〟の最たるものだと信じている。従って我々の運動にも共鳴してもらえると思う。

あの人達の美しい姿、そのように生きたい

井坂信義(30才)

第一御楯特別攻撃隊と義烈空挺隊のビデオを拝見させて頂いた。己が身を全く顧みることなく、後にある人々の上に思いを致し、明るく朗らかに澄み切った心情で出撃して征った隊員の姿は、どう表現しようともし切れない美しいものと思った。ニュース映画の中で最後の訓示をする隊長の姿が出たが、実に堂々と言うべきを言い、やるべきをやる、その姿の中に「日本人」をみた。気高い姿、同胞を信じ切って、後に続くものを信じ、自らの命を捧げて逝かれた。〝不信の時代〟である今の目から見て、何と不思議なことだろうかと思う。〝信ずる〟ということ。祖国を信じ、同胞を信じ、後に続くことを信じた。それは決して〝狂信〟などではない。どこにも狂気などというものはない。

愛する祖国の為、家族の為なら、笑って死んでゆくことができたのであろう。〝祖国を愛する〟ということが、何のことかよく判らなくなってしまった風潮の現在、この人達のことを素直に受け止めることが果して出来るだろうか。どちらが人間らしいかと問われれば、かつての日本人、特攻隊員の方々の方が人間らしいと思う。しかし、〝国のため〟ということを理解すること、共感することは真截には無理かも知れない。〝国〟というものに対する心組が全くできていないことが、その理由である。だから理解しようにもその言葉がない。当り前であったはずの言葉が欠如している。国とは何か、国と自分とのつながりというもの〝国民〟の自覚、こうした意義は、ないのではなく、とらえるための言葉がない。与えられていない。あたり前のことだと思うのに、今や〝国〟と言ったときにこみ上げてくる苦の思いが無くなってしまっている。

作戦の概要、その臨場感、それは当時その中で戦った人のものだ。しかし、今生きている我々にとってそれが〝狂気ではないことは分っても、特攻隊の生き様に感動しても、今の日本ではかつての日本ならばどうするのかということがわからない。唯言えることは、責任を引受け、尊厳を取りもどし、独立自主の気風を回復することだろう。ぬるま湯のような半独立の状態を脱する勇気を持つこと、それは厳しいものだが、それなくしては今後半独立さえも早晩保てなくなるだろう。

あの人達の美しい姿、その姿のように生きようと決意するが、今の自分に果して出来るのか。

〝散る桜残る桜も散る桜〟この国の為微力を竭したい

倉本聖也(30才)

この記録ビデオを見て、特攻作戦に出で立つ若い将兵のさわやかな笑顔、後に残す者への感謝と祈りあふれた遺書の言葉が心に残りました。またお風呂屋のおばさんと特攻兵士の間に交された情美しい逸話、とりわけ特攻隊員のみ魂を菩提寺に托し、戦後ずっとお祀りされていることに、感動しました。生死隔っても、そこには心の交り、結びつきがあるのを感じられました。

自らの命を桜に賞え散っていかれた英霊は、残るもの後に続くものも桜であると詠んでおられましたが、この国の現在と後世の為、微力を竭したいと念願し励んで参ります。

今の私達に願いと期待を感ずる物語り

豆塚美和子

後に続くを信じて散華された特攻英霊の方々、一貫してこの映画に流れているものは、今の私達に願いと期待を感じました。

〝征くも残るも皆桜〟大戦中次々と国を守るため、生命を奉げられた方が後を絶たなかったので、日本が存在したのだと思います。

今の自分の抱えている仕事等を思うと、ストレスがたまり憂うつになったりしますが、生命をかける程重大事にあたって、あれほど澄切ったお気持で

出撃されたことを思うと、何か自分自身の姿勢が正される気がします。

後に続くを信ず――自分はその信を裏切っていないか

坂本義久(34才)

事実を丹念にかつ坦々と綴った手法が、かえって観終った後じわじわと感動を催すという実感だった。それはまさに全編を通じ製作者の英霊に対する深い思いの故だろう。

観賞中は悲愴感が一杯だったが、不思議と今心に残っているのは、隊員たちの従容とした様子である。死を前にして如何にしてあのような境地に達し得たのであろうか。辞世にあったように後に続くものが皆国に尽してくれると信じたからであろうか。

後に続くを信ず――自分はその信を裏切っているのではないかと、日常の我が身を顧みる。また守ろうとする行動の純粋性に感動すると共に、今は守ろうとするものは何かということを、より探求していき度いと思う。

二、陸上自衛隊第一空挺団

千葉県習志野に在るこの部隊は義烈空挺隊の後裔をもって任じ、ここの資料館にはその遺品も展示されているので、ビデオは全員に供覧し多大の感銘を与えたと聞く。代表として三点ばかり感想文を寄せられたので掲載する。これも標題は編集者がつけたものである。

人の命は地球より重いと言った人がいるが、それより重いものは使命感と責任感だ

三等陸尉　関谷　薫(36才)

この度特攻隊戦没者に関するビデオについて私なりの感想を述べる機会を頂き感謝申し上げます。現代日本に生きる者の一人として、また後に続く者の一人として国の礎となられた英霊の皆様に対し鎮魂となれば幸いと存じます。

12月8日は、大東亜戦争の開戦の日ですが、今年もこの日が参りました。私が生まれる20年前に、日本はその総力を結集して世界を相手に戦争を始めそして敗れました。

私が知り得ることは、公にされている戦史の事だけで、戦争というものが実際どの様なものか知りません。しかし、単純に戦争を絶対悪とは考えません。物事には必ず原因と理由かあり、過去の戦争にも日本としての理由があったからに他なりません。

今回「第一御楯特別攻撃隊」「義烈空挺部隊」を観て感じたことは、本当の意味での命の重さと価値であり、特攻という、およそ常識では考えられない任務をも従容と赴く責任感についてでした。

戦後50数年物質的には栄華を極め、何不自由の無い時代となりました。しかし、物では埋め尽くせない何かをこの50年の間に失ってしまったような気がします。

命は地球より重いと言われますが、果たして本当にそうなのでしょうか、主体性もなく漠然と生きるだけの命に地球ほどの重さを私は感じません。命の重さとはそれと共存する使命と責任に裏打ちされた時、本当の重さを持ってくるものであると思います。

「第一御楯特別攻撃隊」の攻撃において、サイパン上空での戦闘可能時間が燃料の関係で5分ほどしか無く二撃したならば、三撃の余裕がないと言はれたとき、参加された隊員は異口同音に「突っ込みます。」と言った言葉に、当時の状況と隊員個々の使命感と責任感を感ずることが出来ます。同じ状況で私も「突っ込みます。」と言えるかどうか、恥ずかしながら自信がありません。今の世の中でしたら「一撃でよいから帰って来い。」と命令されたでしょうし、参加する者もそうするでしょう。とかく今の時代では、人命尊重が強調されますが、命を賭してもやらなければならないことは、やらなければなりません。それは、人命軽視ではなく、如何に死ぬかイコール如何に有意義に生きるかに通ずるものがあると考えます。「大東亜戦争は侵略戦争で、それにより戦没された方々は無駄な死に方をした。」と言った考え方は、現在の自分の存在自体を否定するものに他なりません。そこには自分の肉体を超越した使命感と責任感が存在し決して無駄では無かったのです。

沖縄特攻をした「義烈空挺部隊」にも同じ事がいえると思います。当初は、サイパン島のB―29破壊を命ぜられ、戦況の推移により脇役的な敵飛行場の制圧という新たな任務を与えられながら任務達成に邁進していく姿は、私の心に感動を与えて下さいました。通常であるなら悲壮感に満たされる出撃の際にも使命と責任に裏打ちされた人間の強さと任務達成に臨む爽やかさすら感じることが出来ます。

死に場所を求めていたのかもしれませんが、それは自暴自棄の敗者的なものでなく、常に勝利につながる、又は後に残る者に託し勝利を信じ止むに止まれぬ思いであったのではないでしょうか。それは義烈の隊員が書き残したものからも読み取ることができます。

最近安易に自殺する人が増えていますが、それはそれなりに辛いこと苦しいこと等理由があるとは思います。しかし、眼前の苦しみから逃避する自殺を私は決して許しませんし、同情も覚えません。それは、戦場においては敵前逃亡と一緒であると考えるから、敗者の論理以外の何物でもないと思うからです。

自殺者と特攻により散華された方々を比較すべくもありませんが、命の重さ及び生きる事への使命と責任を考えたときどちらが有意義であるかは歴然としたものがあると思います。ここにあらためて戦後50数年の間に失ったものの大きさを感じるとともに、何としても後に続く者としてそれを取り戻さなければならないと思います。

とりとめもなく、心に思うままの感想を述べて参りましたが、国を想い、同胞を想って散っていた特攻隊戦没者の意志を引き継ぎ、その上に今の自分の存在が在ることに感謝し、命の重さと生きる事への使命・責任を考えつつこれからも進んで行きたいと思います。

任務に向い一直線に矢のように翔び行く姿、我々戦闘集団もそうでなければならぬ

一等陸尉　恩田龍治(32才)

第一御楯特別攻撃隊と義烈空挺隊。この二つの挺進作戦の意義や結果というものについては、ビデオの中で説明され、かつ歴史がその評価を下しているので、ここで多くを語る必要はないと思うが、わたしが、この二作品を観て、深く考えさせられたのは「部隊」というものと「任務」というものの関係である。

これら二つの作戦行動から、研ぎすまされた槍の穂先のような、あるいは、的に向かって一直線に翔びゆく矢のような印象を受けるのは私だけではあるまい。任務というものの重さ、そして任務に対する真剣な態度といったものがひしひしと感じられてくるのである。それは、まさしく、我々戦闘集団における任務の在り方、任務に対する考え方、そして部隊行動とは何かを問うているようであり、一種の緊張感をもたらすものである。

最近の国内外における自衛隊の活躍には目を見張るものがあり、国民の負託によく答えていると思うが、部隊活動といった面からはどうであろうか。あくまでも私見であり、かつ陸上自衛隊に限ってのことであるが、それは、選抜された隊員による臨時編成の部隊の活動といった印象が極めて強い。何か、戦闘集団の行う部隊行動といったものとは異質な感じを受けるのは私だけであろうか。振り返ってみれば、我々の日常の隊務運営・教育訓練等も、そのようになりがちであることは否めないのではあるまいか。

私は、この二つの作品を観て、考え、かつ反省させられるところが大であった。部隊活動の真髄というものは、いったい何なのであろう。

一指揮官として、隊員に対して、それをどのように教え、またどのように訓練していくべきなのか、熟考し、かつ実践していきたいと思う。

任務に殉ずる誇は、我々自衛官もそうでなければならぬ

三等陸曹　彦田真一(32才)

両作品ともわかり易く解説されており、それだけでも勉強になりましたが、それよりも印象に残ったのは、両部隊共に絶対的な死に直面しての隊長以下隊員達の潔い覚悟であり、任務に殉ずる誇りであり、それらのものを支える精神的な強さでありました。それは家族や知人へ宛た遺書や、他に紹介されたエピソードの中から充分に感じる事ができました。時代や世相は全く違えど我々自衛官も、任務の特性上、根底にある精神の在り方は、第一御楯特別攻撃隊、義烈空挺部隊に通じるのではないでしょうか。平時では任務に殉ずる事は少いと思いますがいざという時は我が身を挺してでも危険な事に邁進していかなければなりません。そのためにも心のどこかに前述した覚悟や誇りを持ち続けていきたいと思いました。

今から52年前に散った先人方の強い精神力に敬意を表すると共に、いつの日か我々の大先輩でもある義烈空挺隊の眠る地を訪れてみたいとも思います。

三、あるフリーライターから寄せられたもの

ビデオ「第一御楯特別攻撃隊・義烈空挺隊」を観おわって考えること

嘉瀬秀彦(28才)

私は三年ほど前から第二次大戦に関する雑誌などの記事を書いて、生業の一つにしています。仕事がら、当時の飛行機搭乗員の方の写真をよく見るのですが、その若さ、気迫にみちた精悍な面構えに、いつも感じ入ってしまうのです。とくに特攻隊を命じられた後の表情には、尋常ならざる決意が滲んでいるように思われ、第一御楯特別攻撃隊の方々にも同じことを感じました。

先日、サッカーのW杯予選が終わり、長年の〝悲願〟である。日本代表の初出場が決まりました。私は学生時代にサッカー経験があり、相当な関心をもって観戦していました。しかし思うに、彼ら若い選手たちの顔つきは、どこか頼りなく、劣勢に陥ったときの精神的なもろさ（身体能力の弱さもありますが）には、度々歯痒い思いをさせられました。

W杯は、国家の誇りをかけた〝戦争〟だといわれます。そうしたスポーツ選手と特攻隊員を同列に論じることはできませんし、それはおそらく危険なことだと思います。しかし、あえて申し上げたいのは、一人の男として見たときの特攻隊員の姿です。そこへ至るまでの必死の訓練、純粋な心情、そして最後まで〝やるべきこと〟をやり遂げる、重い責任感。後世、同じ国に生まれた者として、彼らから少しでも何かを見倣っていくべきではないでしょうか。

ビデオ「義烈空挺隊」の最後に、「我ら何をもって彼らに応えんとするや」という碑文の末節が紹介されます。この言葉が意味するものは、何年も前から私個人の、解けない問題でもありました。ただ、最近になっていくらか思うところもあります。一つは、世界に類のない「特攻」という作戦を生み出した、当時の時代状況を少しでも正確に知っていくことです。

そして平和な時代のなかで、本当に必死になるものを自分の意志で選び、そのために、ひたすら手を抜かず最後までやり遂げること。「彼らに応える」ために、この二つで適当なのか、いまだによくわかりません。こうしたビデオ戦記を見ていると、冷静さを失い、ただ無性に泣けてくることが多いのです。そういう感傷に沈むだけでは何も始まりませんが、ただ泣く、ということも特攻隊の方々への供養になるのかもしれない、そのような気もいたします。

四、会員から寄せられたもの

延岡　藤原美々子
（戦争中の女学生）

彩雲の西村さんのお話や義烈空挺隊の奥山大尉、諏訪部大尉の笑顔の出撃に、涙を禁じ得ませんでした。

後に続く者を信じて欣然と散っていかれたこの方々に、もっと感謝しなければいけないと思います。一人でも多くの人に知って貰いたく、近所に観せています。

松戸　柳田志津子
（戦争中の女学生）

亡夫は海軍軍人でサイパンからパガン島に部隊が移動した為、命長らえ復員したのですが、思いがけなくパガン島が出てくるビデオを拝見しました。

このビデオ、涙、涙で拝見しました。唯々拝跪申し上げるのみでございます。

金　文男
（幹候9期　第14教育飛行隊）

去る日、先の大戦に於いて特攻散華した第一御楯特別攻撃隊と義烈空挺隊の行動を収録された、ビデオを拝見する機会を得た。

唯々感激・感謝交々、特に義烈空挺隊の当時を語る生々しい様子を拝し、鬼神も哭くが如きことは、これなる哉と感慨無量の極みであった。

特に強烈な印象に残る、義烈空挺隊の健軍飛行場発進時の将兵の英姿と、その淡々とした言動は、正に虚心坦懐の心境そのものである。搭乗する機の前で徐ろに握手し、何にか一言の語り合い、互に心境を披瀝し信頼する、挺進隊奥山大尉、機を操縦する飛行隊長の諏訪部大尉共に豪放磊落と沈着豪胆な態度に一驚と敬服の念を禁じ得ない。

更に両隊長に従ふ、百余名の隊員は祖国の危急に身を殉ずる決意揚々として、各々故郷に、また両親兄弟に対する今生の訣別を……祖国の存亡を守らん決意を皆にして、その神々しい態度は正に神授と云うべきか。

斯様な状況の下に、純真無垢な、唯々国難に立ち向かう已むに止められぬ行動を、世の人は如何に見るか、この尊くも畏き神霊を崇敬奉慰することが、今世人に求められるものである。近時この様な敬神崇祖の念は軽視され、且つ無為に偏向視されることに危惧を抱くものである。

夫々の国には夫々の歴史があり、民族とし長い傳統と誇りを持つ、この歴史を正視する必要があり、その歴史と傳統を遵守し、国家の護持また教育の徹底を期すべきと思ふ。

国家・民族の栄誉と誇りを妨げるが如き、自虐的な言語態度は、祖国の頽廃に連繋すること必至である。

祖国を愛し、国民一丸となって民族の隆盛に、一億総懺悔し一刻も早い正道に基づくことを希求するものである。

あと一編26ページにある。

明野忠魂塔慰霊祭

平成九年度明野忠魂塔慰霊祭は10月24日11時半から陸上自衛隊航空学校内の忠魂塔前に於て取り行われた。秋爽の好日、続々と参加せられ、定刻、一同黙禱の後、追悼のことばがお二人によって述べられた。

追悼の辞

菊花薫る秋空のもと、本日、ここ、明野忠魂塔の御霊前において、旧明野陸軍飛行学校ゆかりの方々、並びに、駐屯地近隣の町村長を始めとするご来賓各位のご臨席を賜り、慰霊追悼の式を執り行ないご英霊に対し謹んで「哀悼の誠」を捧げます。

顧みますれば、大正九年、この地に陸軍飛行学校が開設されて以来、幾多の優れた航空戦士が巣立ち、その赫々たるご勲功が世界の航空戦史に不朽の名声をとどめていることは、我々の等しく忘れ得ないところであります。

また、航空学校は昭和三十年、浜松からこの地に移駐して以来、四十年余にわたり陸軍飛行学校の栄えある伝統を継承し、陸上航空の先駆けとして教育・調査研究を推進し、その精強化・近代化の牽引力として役割を果たして参りました。

しかしながら、この間、幾多有為の先輩が東亜の各地において祖國の栄光を信じつつ斃れられたことを、決して忘れることはできません。また、戦後の自衛隊においても、教育訓練中、志半ばにして職に殉ぜられた方々があることを想い起こさねばなりません。

わたくしどもは、國家防衛のため、至誠を尽くされた今は亡き先輩諸兄の御霊を安んずるとともに、そのご意志を継承し、この麗しい日本を末永く守り続ける所存であります。

最後に重ねて、ご生前のご功績をしのび、心から弔意を捧げ、その安らかなご冥福をお祈りして、「追悼の言葉」と致します。

平成九年十月二十四日

陸上自衛隊航空学校長
兼明野駐屯地司令
陸将補　吉田　顕彦

追悼の辞

維時平成九年十月廿四日菊薫る錦秋の佳き日、戦後五十二周年の節目を迎え茲に第三十八回追悼慰霊の式を挙行するに方り謹んで哀悼の誠を捧げます。

顧みれば御英霊は陸軍航空の創設育成及び強化に挺進して尊い身命を捧げられ、又過ぐる数次の事変及び大東亜戦争に於て満州、中国、ビルマ、南西太平洋、ニューギニア等の空に武勲を樹立して散華せられ或は壮烈鬼神も泣く特攻攻撃を敢行して玉砕せられ又日本国土の防衛に当り敢然邀撃して殉国の礎となられ或は自衛隊に於て訓練等にて殉職される等我が日本国の平和と繁栄を念じて祖国の守護神となられました。

―中　略―

私共は微力不敏でありますが御英霊の遺徳を体し且つ顕彰し、又後輩の人達に伝え、皇室の御安泰と国家国民の平和発展に渾身の努力を致す覚悟であります。

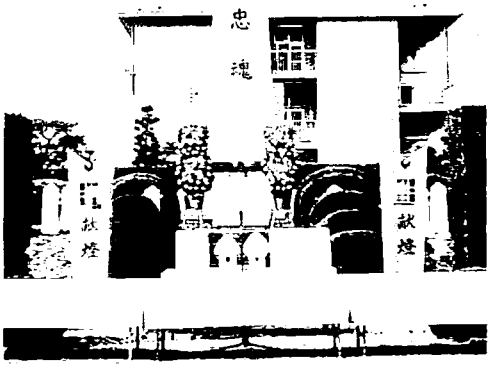
庶幾くば御加護を垂れ給わんことを。茲に恭しく御冥福を、お祈して追悼の辞と致します。　合　掌

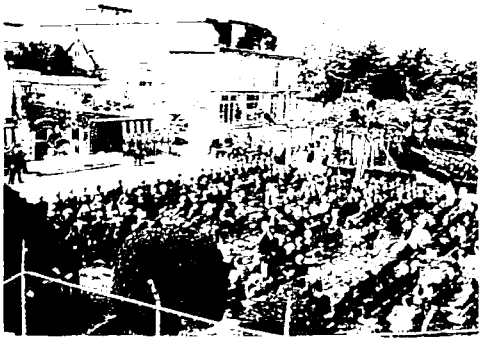
平成九年十月二十四日

明野忠魂塔顕彰会会長
谷口　正義

式後、大食堂で顕彰会総会及び懇親会が行われ、この席で谷口会長から「会員の加齢と事務作業の面から、陸自側に慰霊祭の実施につき移管方をお願いしたところ、快諾を得た旨」の話しがあり、続いて陸自駐屯地司令からも「来年度から全面的にお引受けし、実施致すことになりました」と述べられた。出席総員352名、満場期せずして大喝采であった。このようにして慰霊の行為が後々までも引き継き、続けられることは本當に有り難く、感謝に堪えない。

深川　記





陸軍海上挺進戦隊戦没者慰霊碑
平成九年度慰霊小祭

平成9年10月22日13時10分より好天気に恵まれて、慰霊小祭を催行致しました。

海上挺進戦隊の訓練基地のあった広島県安芸郡江田島町幸之浦の海岸堤防用地に、慰霊碑を建立除幕したのが、昭和42年、それ以来四年毎に慰霊大祭を行いその中間で小祭を実施して参りました。小祭の場合は主として広島県内の遺族と元隊員に呼びかけ、大祭は全国のご遺族、元隊員に呼びかけて行って来ております。

元第十教育隊長の斉藤顧問（陸士44期）は、ご長男さんの付添で来られました。88歳のご老体をかえりみず、遠路小祭に参列して頂き、私ども実行委員一同頭が下がる感じでした。

白砂の浜にうちよせる瀬戸の波は当時と少しの変りもなく静かに静かに、水上スクーターが白波をかき分けるように走り廻っているのが今の平和の象徴のようにうつります。

顕彰会長は京都市在住ですが、体調を崩し欠席したので、実行委員長の私が式辞をのべました。式辞の中で私の手許に浜田市在住の山根鉄夫さんより慶良間で戦死した弟山根仙公君を偲び、弔辞として「海上挺進隊に捧ぐ」の漢詩を託しておられたので、下手な吟詠で捧げさせて頂きました。

斉藤顧問は追悼の辞の最初に「特攻平和観音経」を奉唱し、参列者一同もこれに続いて奉唱しました。事前に私の所に電話があり、配布資料に「観音経」を印刷し渡しておりました。続いて江田島町長の追悼の辞、隊員代表佐古田芳明（第四戦隊員、特幹一期生出身）が魁けた戦友を偲び切々と呼びかける追悼の辞を捧げました。

献花にうつると、「海ゆかば」のメロデーの流れる中に次次と白菊を碑前に供えました。最後に船舶隊の歌を合唱して式を終了しました。

次回は平成11年に慰霊大祭を行う予定で、そのまでの間に関係者と協議して永代祭祇の方法を検討したいと考えています。ご遺族も、元隊員も年を重ね、体調不調を訴えるものも多くよりよい方法を見い出したいと念願しております。何と言っても心強いのは、地元幸の浦区の出身の七柱の戦死者を併祀しており、地元の力強い協力が創立以来続いておることで、いつお参りしても花の絶えていたことはなく、誰がお供えしたか、お賽銭もあり、雑草ひとつなくいつもきれいに維持されておることを紹介しておきたいとおもいます。平成9年度慰霊小祭を終了し一筆報告致します。

陸士57期44戦隊付　田村敏雄

原町特攻隊員慰霊祭

（福島県原町市）

福島県原町飛行場関係戦没者の慰霊祭は、平成9年10月10日に、特攻隊員ゆかりの陣ヶ崎公園墓地で行はれた。

これは同市の慰霊顕彰会（会長渡辺祐一、事務局八牧通泰）が毎年実施しており、今年で二七回となる。

今回も地元及び東北は勿論、遠く九州、四国などから、特攻隊員の遺族・戦友・関係者二百余人が参列した。

同地は昭和46年度建立された慰霊碑と銘名板、そして飛行服に身を包み、微笑を浮べ、別れの敬礼をしながら出発する隊員の銅像があり、当時を偲ばせている。

この地の隣りは、有名な相馬野馬追いの雲雀が原で、同地は戦時中は原町飛行場であった。春は桜、秋は紅葉が美しく、当時、飛行隊員の逍遙の地で、今年の慰霊祭の日も昔と変らぬ自然の姿で人々を迎えてくれた。

慰霊祭は、参列者一同黙禱を捧げ、特攻隊ゆかりの神主森鎮雄の祭主で行はれ、来賓、遺族、戦友の追悼の言葉が続いた。特に板垣正参議院議員、植草義四郎、最上貞雄航空特攻団体代表の切々たる慰霊の言葉には、一同胸を打たれるものがあった。

特攻隊員は祖国存亡の時、身を挺してその急に赴かんとして征き、そして再び帰へらなかったのである。彼等は、日本の再建と平和独立に、己の後に続く者ありと信じていた。

戦友は式辞に、「特攻隊員のその志に、果して今の日本人は尽しているだらうか。」と切々と述べられた。

慰霊祭の最中、秋風が時々強く吹き、生花や式具が倒れ、在天の特攻隊員の意志を伝えるが如きであった。

終りに、原町メンネンコールの会員が、想い出の歌、鎮魂の歌を合唱、慰霊祭を終えた。

原町航空隊は、当初熊谷飛行学校の分校として始まり、明野、次いで鉾田分校となり、若い航空隊員がこの地で訓練に励み、そして飛び立って行った。今、彼らは雲の彼方にある。

文責　佐久間博信　宮城・陸士56期

川南護国神社例祭

11月23日

—そこには陸軍空挺部隊戦死者一万余柱が合祀されている—

宮崎県児湯郡川南村（現在は町）には広大な降下場と飛行場があり、陸軍空挺部隊の主力が此処を基地としていた。陸軍挺進練習部の構内には全戦死者を祀る挺進神社があったが、終戦後米軍に焼払はれてしまった。またこの村には戦死者を祀る霊堂があったが、終戦直後の台風で倒壊しそのままになっていた。24年に村の戦死者六三四柱と空挺部隊一万有余柱を合祀する霊堂が再建され、我が国が独立を回復した後、村当局によってこれを護国神社として整備された。そのような次第で毎年11月23日に、奉賛会長である町長が祭主となり、町挙げて盛大な祭典が行はれている。

この祭典には全国各地から戦友が多数参列していたが、老齢化に伴い追々減少し、それに代って千葉県習志野に在る自衛隊空挺部隊の現職隊員及びそこを退職した在野の者が加わり、地元民以外の参列者は百名を越した。

川南護国神社には専属の社務所はないが、町当局が賛賛会業務を担当しているので祭典も絶えることはない。近く資料館も完成するという。空挺部隊の御祭神に対しても奉賛する後継者があるので、我々の時代が去っても変わることはない。

今回も我々が奉納した油絵一八点が境内に展示された。それは御祭神の威武を称える画題で、当協会員松本画伯の筆に成るものである。祭典にあたり戦友代表が神前に奉った歌は次の通り

川南護国神社に斎き祀れる
落下傘部隊の御祭神に
老兵謹みて腰折歌を捧ぐ

日向のくにの　うましさと
集ひて結びし　もののふの
深きえにしは　かたくして
けふの祭りに　さんじきぬ

宮居に鎮まる　我がともの
まなじり高き　つはものが
真白きバラの　はな負ひて
遥けきおもひ　からせばら

大みことのり　かしこみて
みなみの空に　はなひらき
たちまち降す　パレンバン
凱歌のかげに　なみだあり

〝旺んなり赤道越えて天かけり
やまと男の子の　ああ晴れ姿〟

力　山を抜き　気世を蓋ふ
時に利あらず　騅逝かず
レイテの空や　ルソンの野
雄しく散れり　さくらばな

〝花負ひて空うち征かん雲染めん
かばね梅なく　我等散るなり〟

帰ることなき　沖縄に
莞爾と飛立つ　義烈の士
祖国の山河　はらからを
命と換えし　特攻隊

〝続くものありと思へばもののふの
道ひたすらに　駈けしをのこら〟

星辰めぐりて　五十年
平和のひかり　あまねきも
国に殉ぜし　神々の
事なすわれそ　若人よ

地元出身者の御祭神に捧ぐ

〝尾鈴ねや平田の流れは清くして
うぶすなの人　姿おもほゆ〟

〝千早ぶる護国の宮にぬかづきて
守り給へや　うらやすのさと〟

註　尾鈴山は西に聳えており、そこから平田（へた）川が流れている

田中賢一

平成九年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員の追悼式

日時：平成9年11月9日　一三三〇／一五〇〇
場所：徳山市大津島　回天記念館　回天碑前

評議員　小瀬　利春

大東亜戦争末期に戦没した回天搭乗員一〇六名ほか隊員の慰霊祭は、回天の訓練基地であった山口県徳山湾の大津島で、昭和30年に地元有志により最初に執り行われ、35年に「回天碑」建設、昭和37年からは毎年、盛大な慰霊祭が開催されている。

地元有志者の団体「回天顕彰会」が募金運動の上、「回天記念館」建設を昭和43年に達成し、徳山市に寄付した。平成3年よりは、回天を搭載し戦場に赴いて還らなかった潜水艦八隻の乗員八一〇名を加えて共に追悼する、宗教色のない式典の形となり、毎年11月の第二日曜日に開催されて今日に至っている。

平成9年の追悼式は11月9日13時30分より厳粛に執り行われた。御遺族約四〇名と県、市ほか各種自治体、国会議員、海陸空の各自衛隊、地元諸団体、会社の代表、地元有志、旧軍関連の団体など三百余人が、大津島の回天記念館前庭の白菊の花に囲まれた回天碑に参集した。御遺族は、北は北海道、西は長崎の、全国各地から参加されたが、そのなかに本年は回天の創始者、故・黒木博司少佐の兄上の姿も見えた。

雲ひとつない見事な秋晴れとなり、周防灘に面した魚雷発射場跡からは、九州の山影が青い海の彼方にはっきりと望まれた。慰霊飛行の自衛隊機の編隊も、高く澄んだコバルトの空にひときわ鮮やかであった。

恒例の「大徳山太鼓・回天」が、真っ黒に塗装された実物大模型の回天の前で、一七名の若い男女によって演奏された。勇壮な太鼓の音を聴くうちに、国を、民族を、愛する人々を護るために進んで自らの生命を捧げた隊員たちの面影が、次々と眼の前に浮かび、涙が滲んでくる。この太鼓のグループへの参加を希望する青年たちが最近は多いと聞くにつけ、徳山近在の市民の回天、また特攻に寄せる関心が高いことに、日本の将来が力強く思われる。

ＪＲ徳山駅の南側にある桟橋と大津島を結ぶ巡航船に本年、徳山市が建造した高速船「回天」が加わり、運航を開始した。在来の定期船の半分の所要時間、二一分で島に渡ることが出来るようになり、便数もひと頃の倍、一日一二便に増え、ＪＲの周遊地にも指定された大津島との往来が、かなり便利になった。

「旅客船に、神聖な人間魚雷・回天の名をつけるとは何事か」と本年四月、徳山市長に対して船名撤回を求めた投書が発端となり、朝日新聞ほか各種の新聞が採り上げて、賛否の大論争が巻き起こった。中には「殺人兵器の名前を客船につけるのか」との異論まで飛び出す混乱ぶりであるが、いずれ収束がつくと思われる。図らずも「特攻」を改めて考え直すきっかけを、世間の人々に提供した結果になっている。

回天記念館は、所蔵する千五百点に及ぶ回点戦没者の遺品、遺筆の永久的保存を期して、徳山市の予算で本格的な保管展示場に改築する工事に入るため、明年初から10月末まで休館する。次の平成10年11月8日の追悼式には、新装成った記念館でビデオによる解説も聞けることになる筈である。

その日は昭和19年、回天特別攻撃隊の第一陣菊水隊の回天搭乗員一二名が潜水艦三隻と共に大津島を出撃して行った、記念すべき日に当たるので、多数の参会が望まれている。

回天全戦没者ひとりひとりの名簿の前で偲ぶ御遺族たち

大津魚雷発射跡

全国回天会長野大会

去る10月7日・8日全国回天会長野大会が開催され、それに先立って長野市の善光寺大本願において回天特別攻撃隊戦没者の慰霊法要が執り行われた。

当日は北は秋田・宮城から南は鹿児島から御遺族16名を含む130余名が出席、7日13時30分より善光寺上人鷹司誓玉尼公厳修の下に執行された。

小薬会長の追悼の辞のあと読経に移った。鷹司尼公以下ご来席の僧侶はすべて尼僧であった。読経の途中で黒木博様・樋口孝様と9月6日殉職されたお二人の名が唱えられ、おやっと思っていると上別府宜紀様・村上克巳様と菊水隊の各戦死者名が唱えられ、続いて伊号37潜神本信雄様以下112名様と回天作戦中のすべての戦死者・殉職者104名の名前と戦没潜水艦8隻の名前が唱えられた。そして最後に橋口寛様・松尾秀輔様と終戦時の自決者名が唱えられて又読経となり終了した。

慰霊祭においてこのように戦没者全員の名前を唱えられたのは初めてであり、参列者一同往時を偲び感涙にむせんだ次第である。更に読経後の法話の中で「今日の日本の繁栄は戦に散った御英霊のご加護は勿論であるが、同時に今日ご参列の皆様のご努力によるものです。」と明言され、一同感銘深く法要を終了した。記念撮影の後本堂内陣参拝、更に戊辰の役から大東亜戦争までの全国戦没者を佛式でまつる霊廟である日本忠霊殿を参拝した。その後会場を上山田温泉の圓山荘に移し大会となった。大会終了後懇親会となり談論風発懐旧談に花が咲いた。

翌8日はバス2台に分乗、松代の真田資料館を見学、川中島の古戦場更に長野冬期オリンピックのスピードスケート場である「エムウエーブ」を見学して、新幹線が開通したばかりの新装なった長野駅に到着、来年の東京大会での再会を約して散会した。

当協会よりの参加者は、小薬利春・河崎春美・山田達雄の3名であった。

山田達雄

回天関係慰霊行事・平成9年

97.11.1　全国回天会

月日	行事名	場所	主催団体	慰霊対象
1月2日	靖國神社初詣	靖國神社	全国回天会	回天戦没者
4月25日	大神回天神社例祭	大分県	大神回天会	回天戦没者
5月11日	特攻殉国の碑慰霊祭	長崎県川棚町	特攻殉国の碑保存会	魚雷艇、震洋、回天
5月11日	特潜碑顕彰祭	広島県音戸町	特潜会	甲標的、回天、海龍
5月25日	回天慰霊祭	三重県香良洲	東海回天会	回天戦没者
8月13日	光慰霊祭	山口県光市	光市連合婦人会	光工廠戦没者、回天
8月15日	神潮特別攻撃隊・第2次大戦戦没者之英霊鎮魂祭	山形県月山	三山大愛教会本山	回天戦没者
9月7日	楠公回天祭	岐阜県下呂町	回天楠公社奉賛会	回天戦没者
10月7日	善光寺慰霊祭	長野市善光寺	全国回天会	回天戦没者
10月10日	光回天追悼式	山口県光市	光回天の会	回天戦没者
10月10日	鎧地蔵尊開眼供養	山形県湯殿山	山形県回天会	回天戦没者
11月8日	潜水艦殉国碑慰霊祭	東京都渋谷区	潜水艦殉国碑奉賛会	潜水艦、特潜、回天
11月9日	回天烈士追悼式	山口県大津島徳山市	回天顕彰会	回天、同搭載潜水艦

絵葉書とビデオを使って広く国民に訴えよう

我が協会の前身である「特攻隊慰霊顕彰会」が、昭和61年靖國神社遊就館再開と共に特攻展示室を開設した。またこの会報27ページに述べている通り有志会員による絵画展示を平成4年以降行っている。実は協会としてこれ以外に一般大衆に呼びかけることは何も行っていなかった。そこで昨年は八枚一組の特攻の絵葉書を作った。昨年中に二千組頒布できたが、本年は五千組は頒布したいと思う。入手した人が郵便葉書として使ってくれれば5万人位の人の手に届くがと皮算用している。

次はビデオであるが、これは旧年中に250巻ほど頒布できたが入手した人が果して何人に公開してくれたであらうか。本年は累計で500巻にしたいと思う。一人が平均20人に公開してくれたら1万人に見てもらえるが。これが当事者の悲願である。御協力下さい。

第一御楯特別攻撃隊慰霊祭のあゆみ

西村友雄

大東亜戦争の天目山と称されたマリアナ群島が奪取され、そこから飛来するボーイングB29の大編隊が初めて本土空襲を開始してから三日後の昭和19年11月27日、私は海軍の新鋭偵察機「彩雲」の後向きの電信席から、後続する零戦十二機を真正面に見ながら二時間半の時を過ごした事がある。

この零戦隊はサイパン島飛行場に配備されているB29群を銃撃で破壊炎上させる作戦の為に、千葉県館山基地の戦闘三一七飛行隊の大村謙次中尉（海兵七十二期）を隊長として編成されたもので、サイパン特別銃撃隊と呼ばれていた。

彩雲はこの零戦隊と共に硫黄島を発進後、途中のマリアナ群島北部のアグリガン島まで誘導する任務を命ぜられていた。サイパン特別銃撃隊は当初の作戦計画では、銃撃終了後にパガン島へ不時着すれば潜水艦で救出する計画が立てられ、その為銃撃は二回に制限すると指示されていた。

しかし私達は、前日の作戦会議の後で数名の零戦隊員から、その指示に反する「全弾を撃ち尽すまで攻撃を繰り返し、その後突入する」という決意の言葉を聞いていた。

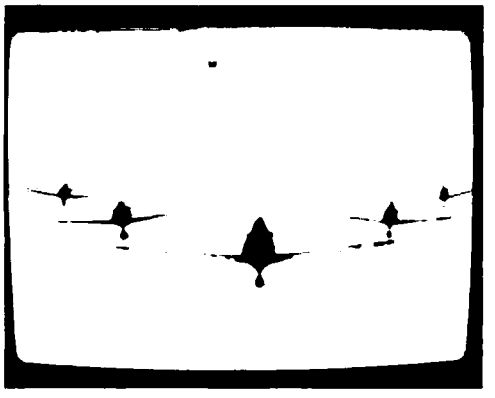
そして進撃中の事故でパガンに不時着した一機を除く十一機は全弾を撃ち尽した後総て散華した。その不滅の戦勲により零戦隊十一名は戦死後間もなく「第一御楯特別攻撃隊」として全軍に布告された。

私は誘導中の機上で零戦隊員の覚悟と心情を思い、「もし自分がこの戦争で生き残るような事があったなら、この状況をご遺族に伝えなければならない」と心に誓った。だがその実現は申し訳ない事ながら昭和49年11月になってしまった。

そして彩雲の操縦員だった広瀬正吾さん（平成6年死去）と昭和51年11月27日に初めて「第一御楯特別攻撃隊」の慰霊祭を靖国神社で執り行った。その後、大村隊長の実兄大村行雄氏から「西村さんが出来なくなるまで慰霊祭を続けて欲しい」と頼まれ、52年以降毎年欠かさずご遺族と戦友等関係者が集い靖国神社で慰霊祭を行っている。

今年は、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が「第一御楯特別攻撃隊」と「義烈空挺隊」のビデオを作製されるに際し、私がいささかの協力をしたご縁から、協会の田中賢一氏、飯野伴七氏（大村隊長の同期生）にも第二十一回慰霊祭に参列して頂いた。

あの「第一御楯特別攻撃隊」誘導から53年が過ぎたが、今でも目を瞑ると零戦隊とアグリガン島で別れた時の感動のシーンが鮮やかに浮かんでくる。



ビデオの一駒　誘導機「彩雲」に続行する零戦の編隊。

このビデオの末尾は次の歌で結ばれている。（編者）

醜鷲を打ち破らんの一念に
我が身ありとは思はざりしか

ビデオを見ての所感（続）

飯野伴七

隊長大村譲次中尉は海兵72期戦闘機専修の同期生であり、その偉業は全海軍に伝えられた。航空隊のみならず、全海軍に勇気百倍の士気を鼓舞した。しかし戦局は日々に厳しく、この壮挙も空しく戦敗れた。

戦後混乱の中漸く昭和28年遺骨収集団により、サイパン米軍基地に手厚く葬られていた大村中尉の遺骨は母国へ帰還、母の胸に抱かれたとの報道があり、また戦記誌上で奮闘の模様が伝えられたり、西村友雄氏の手記を読んで承知したのも数年前のことだった。

今回、すべての資料を集めて厳選し、写真も三航艦寺岡長官を中心に出撃直前、誘導の彩雲隊員も含めた全員鮮明なもので、まことに貴重な物語である。画面上で体面できて懐かしかった。

当時誘導の任にあたり只一人の生き証人である西村氏の、祖国の安泰を念し身を祖国に捧げたあの人達のことを、後世に伝えねばならぬという執念には深甚の敬意を表し、大村隊長の同期生として衷心よりお礼申上げる。

英霊も御嘉納せられたであらう。

巻末の短歌二首は、このビデオの真価を表していて、後世に問いかけて余りないと信ずるものである。

戦没者慰霊画展示に関する報告

松本武仁

平成3年2月、特攻隊慰霊顕彰会で標記を発議、実施につき採択されたので、同年9月、世田谷観音慰霊法要の会場にて第一回の展示を実施、翌平成4年から、年2回の特攻隊慰霊祭、月2～3回程度の靖國神社参道展示を実施して現在にいたる。平成4年の8月15日の靖國神社展示には、左記各氏の作品が展示された。

西野弘二、谷晃夫、松江勝馬、生田惇、徳高光造、伊藤直之、松本武仁、海佳秀一、中野友次郎、市川国雄、佐藤彰平、野崎慶三

平成9年9月からは、特攻戦死者遺詠の書を毎回展示している。出品者は伊藤直之、金文男。

平成9年・展示実績（世田谷観音、千葉護国神社以外は靖國神社）

3月16日、30日
4月2日（靖國特攻慰霊祭）、13日、20日、22日（靖國春季例大祭）
5月4日、11日、18日
6月1日、15日
7月6日、13日（みたま祭）
8月10日、15日（終戦記念日）、17日
9月14日、23日（世田谷観音特攻慰霊祭）、28日
10月5日、10日（少飛会靖國慰霊祭）、12日、18日（靖國秋季例大祭）、19日、25日（千葉護国神社房総偕行会慰霊祭）、26日
11月9日、23日
12月8日（開戦記念日）

計29日

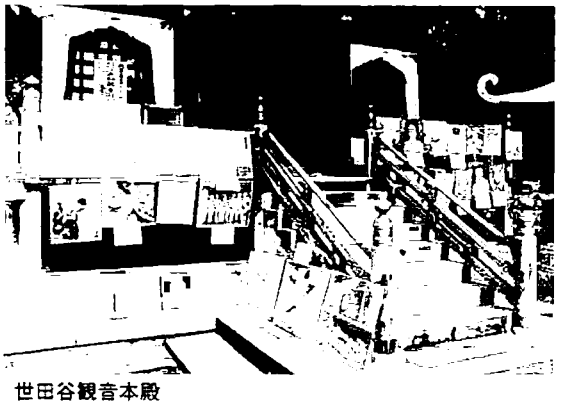
(1) 展示時間8：30～15：00
(2) 展示数　毎回40～50点、9月23日以降、油絵20～30点、書12～15点
(3) 出品者　油絵・伊藤直之、市川国雄、松本武仁、中野友次郎、海佳秀一、村山軍喜（ブラジル日系2世）、橋元嘉典（ブラジル日系2世・元特攻隊員）
(4) 展示作業・説明員参加者
伊藤直之、松本武仁、佐々木由松64FR、大江仁(61)、関口正孝(61)、佐野和夫(61)、奈良部光孝(61)、一ノ瀬恵美子（遺児）ほか戦友連有志2～3名、(61)とあるのは士61期

この事業は発案者松本武仁氏の熱意と、(4)に出ている人々の支援によって既に数年間続いている。唯残念なことに一般大衆に訴えているのは、靖國神社参道におけるものだけで、年一回の世田谷観音における展示は、特攻観音法要の際だけで、観覧者は我が会員だけである。本年新に房総偕行会の行う千葉護国神社における慰霊祭に展示したが、これとても観た人は我々と志を同じくする百数十名に過ぎない。

昔の小学唱歌にあった〝囲炉裏の端に縄なう父は、過ぎしいくさの手柄を語る〟と、今や戦に臨んだ兵士の志を語る人は残少くなった。世を風靡する自虐的厭戦思想は国を危殆に陥し入れている。この絵画展を大衆に訴える場所で開催し、救国の一助にしたい。次頁に予告してある柏の特攻展のように

編者

靖國神社参道


世田谷観音本殿

千葉護国神社

昭和史の証言（Ⅱ）

「特攻散華（とつこうさんげ）」　特別攻撃隊資料展

・日　時　平成10年２月28日（土）～３月３日（火）　４日間
　　午前10時～午後８時
　　但し、初日28日は午後１時より、最終日３日は午後３時まで
・場　所　柏市民ギャラリー（柏市公共施設）　柏高島屋ステーションモール８階
　　（ＪＲ柏・東武柏駅西口駅ビル）　☎0471-48-2211
・入場料　無　料
・主　催　偕行生涯学習塾
　共　催　常磐陸士第61期生会
　後　援　財団法人　特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会・「日本会議」
・連絡先　中江　仁
　　〒277　千葉県柏市松葉町６-41-11　☎0471-31-2156
［前　　回］昭和史の証言（Ⅰ）「二・二六事件遺品展」　平成９年２月15～18日
［次回予告］昭和史の証言（Ⅲ）「昭和20年８月終戦」資料展

◇

［資料展の趣旨］

私達は、平成９年２月に、「昭和史の証言」シリーズ（Ⅰ）「二・二六事件遺品展」を開催し、期待をはるかに上回る２千人を超える大勢の人々にご覧いただきました。

今回、シリーズ（Ⅱ）として、上記により特別攻撃隊の資料展を開催することに致しました。世界を二分したさきの大戦において、祖国と同胞を護るために、かけがえのない命を自ら捧げて散華した特攻隊若桜は七千名にのぼりました。今回の資料展は、この若桜に深い想いを寄せて、今日の平和と繁栄を享受する人々、特に21世紀を担う若い世代がより深い歴史探求への関心を高め、国家と民族の将来を考えるきっかけとなることを願い．これを企画致しました。

会場には靖国神社遊就館から今現在陳列展示されている特攻隊員の遺品、社蔵の史資料82点を借用し、之に加へ特攻隊の油絵25点、辞世の歌30点等々多数を陳列して、特攻隊の史実を語りかけます。

前回にも増して、より多くの方々のご来場をお待ちしております。

平成10年２月

偕行生涯学習塾　　代　表　中江　　仁
常磐陸士第61期生会　　会　長　酒寄　和郎